第12回 全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞 発表

全国同人雑誌振興会・文芸思潮による第一二回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」選考会は、二〇一八年十月三十日火曜日に東京都大田区民プラザ会議室において、三田誠広氏、中上紀氏、小浜清志氏、五十嵐勉「文芸思潮」編集長の四名の選考委員によって厳正に行なわれました。作品ごとに選考委員から熱い批評が発せられ、濃密な議論が交わされました。選考の結果、以下のように決定いたしましたので、ここに選評とともに発表させていただきます。

また全国からの読者の投票と寄付による読者賞の投票および内容の結果も併せてここに発表させていただきます。「まほろば賞」受賞作品には、賞状と賞金十万円（賞金は寄付によるものです）および記念トロフィーを贈らせていただきます。また河林満賞には賞状・賞金五万円と記念品を、中上紀賞には賞状・賞金五万円と記念品を、また読者賞・優秀賞には賞状と賞金三万円・記念メダルを贈らせていただきます。

今後も全国の同人雑誌の中から優れた作品が生まれることを祈念し、たくさんの同人雑誌の作品が全国同人雑誌振興会・文芸思潮に寄せられてくることを期待しております。

また、どうぞ作品の推薦にも多数の方が御参加くださり、また積極的に読者賞への投票に加わっていただき、ぜひ皆様自らの熱い手で同人雑誌の優秀作品を選び、この賞を育てていっていただきたいと存じます。全国の同人雑誌諸氏の熱い支持を切にお願いする次第です。

この結果また優秀作はインターネットでも発表される予定です。どうぞ御覧いただけましたら幸いです。

なお、まほろば賞の表彰は、当初明年二〇一九年に開かれる全国同人雑誌会議で行なう予定でしたが、今回は授賞式はなく、直接お手元に送らせていただきます。お許しください。

第12回全国同人雑誌最優秀賞 まほろば賞

「アフリカの弦」（「西九州文学」40号）
寺井順一

「お願いですから」（「文芸中部」106号）
堀井　清

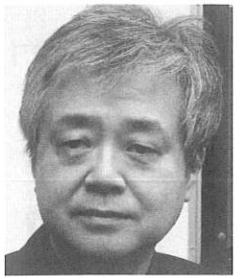
河林満賞
「隣人」（「あべの文学」26号）
河内隆雨

中上紀賞
「擬似的症候群」（「ガランス」25号）
小河原範夫

読者賞
「ダルニーの瞳」（「カオス」23号）
朝川　彪

優秀賞
「ラスト・マン・スタンディング」（『星灯』5号）
野川　環

まほろば賞賞金は、三田村博史氏、来の宮あんず氏、故原石寛氏、夏目火美子氏、木内是壽氏、前岡光明氏、今田真理子氏、二宮英郷氏などの御寄付によるものです。ここに厚く御礼申し上げます。また「狐火」「安芸文学」「ぺん」「海」など文芸思潮同人誌団体会員の御協力にも厚く御礼申し上げます。



みた　まさひろ
1948　大阪生まれ
早稲田大学文学部卒
77「僕って何」で芥川賞受賞
作品はほかに「いちご同盟」「空海」「親鸞」など
日本文藝家協会副理事長
著作権情報センター理事
日本点字図書館理事
武蔵野大学文学部教授

甲乙つけがたい作品が覇を競う

三田誠広

今回は例年以上にレベルの高い作品が並んでいて選考は難しかった。委員の意見が分かれたということではなく、甲乙つけがたい作品が覇を競っていて、結局のところ二作同時受賞となったが、わたしの印象としては、三作受賞でもよかったと思うほどだ。

寺井順一の『アフリカの弦』は緊張感に満ちた異国の話で、エイズに冒された女を見る男の眼差しにハードボイルドの主人公のような強靱さと孤独感があった。人物の内面を説明しすぎない文体の硬度が心地好かった。暴力的な場面もあるが感傷を排除し、最後まで硬質の文体を崩さなかった。この作品を第一に推したいと強く思ったが、他にも完成度の高い作品があって、判断がつかなかった。

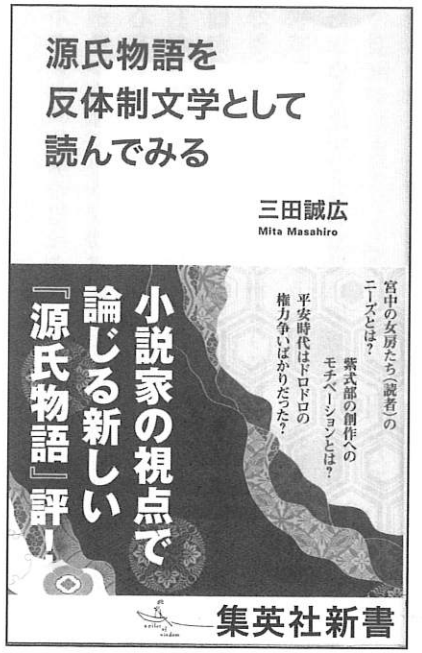
河内隆雨の『隣人』の完成度の高さには驚かずにはいられなかった。小さなアパートの住民のすべてが善良な人間であるという設定は、中間小説めいていて純文学としては迫力を欠くのだが、その設定を不自然と感じさせないだけの文体の安定感があって、読者は作品の世界に引き込まれ、ほろりとさせられてしまう。これは卓越した技倆であって、これを認めないわけにはいかない。ただこの作品の通俗性を指摘する委員もあり、評価は分かれた。主人公は高齢者で、わたし自身と年齢が似ている感じがして、候補作の中で最も共感がもてたことは確かだ。

同じように高齢者を主人公とした堀井清の『お願いですから』は、私小説めいた語りの中に仕掛けがあって、巧妙に構成された虚構だとわかってくる。まず台詞にカギカッコをつけない文体に特色があって、内面の思考と実際の会話とが地続きでつながっている。そこから文章の全体がやや認知症気味の高齢者の妄想かもしれぬと思わせるところがあり、主人公が万引きをして「お願いですから」と謝罪するところも、自分の車の前に飛びだしてきた自殺願望の高齢者の「お願いですから死なせてほしい」という台詞と呼応していて、死へのいざないを予感させながらも、意図的にリアリティーを削いだ手法かと感じさせる。その主人公が最後に、同居している娘から突き放されるくだりが巧みなエンディングで、ここでにわかに現実と直面する主人公のあわてぶりがユーモラスだ。この文学的な試みに満ちた作品が最終的に高い評価を受けることになった。

小河原範夫の『擬似的症候群』も意欲的な作品で、怪しい女装の若者が何やら宗教めいた活動をしているところに高齢者が巻き込まれる展開がミステリアスに語られる。その教祖の若者が自分の息子かもしれぬと主人公が感じ始めるくだりを読んで、読者は巧妙に仕組まれた詐偽なのだろうと予想することになるのだが、欺されて金を盗られた主人公がそれでも何となく納得してしまうところに意外性があって、結局のところ詐偽の真相も若者の正体も最後まで謎のままで残される。こういう謎を解明させない手法が試みとしてはおもしろいのだが、何が何やらわからぬままで終わってしまったと感じる読者も少なくないのではないか。ただそこのところをわかりやすく書いてしまうと作品の魅力が半減するかもしれず、難しいところだ。

朝川彪の『ダルニーの瞳』は旧満州の大連を舞台にした作品で、終戦直後の混乱の中で逞しく生きようとする女性の姿が鮮やかに描かれている。経歴を見ると大連生まれらしい書き手の、どうしてもこれを書きたいという思い入れが伝わってきて、好感をもって読み進んだ。文章に安定感があり、楽しい読み物になっていることは確かだが、女性を主人公としたことで、展開が通俗的になったところがあり、そのぶんだけ痛切なものが稀薄になったようにも感じられる。それが作者の狙いなのだろうとは思ったが、いくぶんものたりなさを感じてしまった。

野川環の『ラスト・マン・スタンディング』は若い書き手の意欲作で、原発事故で汚染された地域にあえて乗り込んでいく主人公の心意気に共感を覚える一方、少し無鉄砲すぎないかと心配させられ、書き手の意欲が空回りしているようにも感じられた。とはいえこういう題材にあえて取り組んだ作者の前向きな姿勢は高く評価したいと思う。



こはま　きよし
1950 沖縄県生まれ
劇団四季など様々な職を遍歴
87 作家中上健次に師事、マネージャーを務めるかたわら文学修行
88「風の河」で文学界新人賞を受賞
他の作品に「消える島」「後生橋」「光の群れ」「火の闇」などがある

どの作品も魅力的

小浜清志

今回のまほろば賞もレベルが高く、どの作品も魅力的だった。毎回思うことだが文芸誌に名前を出す人達と全く遜色のない作品があちこちにあると言うのは驚きである。世間の賞獲りレースとは別に、同人誌の競争がもっと盛り上がって欲しいと願うばかりである。

「擬似的症候群」は準大手の建設会社で役員までのぼりつめたウンノクニオが、住んでいるアパートの上の階に引っ越してきた水守透というニューハーフぽい男から引っ越しの挨拶を受ける所からこの小説は始まる。お決まりのタオルの他にチョコレートでも入っていそうな箱を差し出すと、足音や物音が聞こえてくるかもしれないので気になるようでしたら直接言って下さいと名刺を渡す。ITコンサルタントの仕事の他によろず相談をやっているので訪問客が多いのだという。初対面であるにもかかわらず水守が関心を寄せているようでウンノは警戒する。言われた通り階上からは夜毎に足音や話し声が聞こえる。しかし、ウンノはかつて法律に触れるような仕事もしてきたので私生活はできる限り波風を立てないようにしてきたこともあり、すべては腹に収めると決める。だがある夜いつもより変わったうめき声がするので思い切って電話をしたことで水守との交流が始まり、ウンノは過去に犯した過ちを思い出すことになる。結婚を約束しながら子持ちの女をもて遊んできたことがあった。あの時の連れ子が実は水守ではないのか。その疑いを抱きつつも関係が深まり、ついに入会をし、挙句の果てはそれ相当の金まで振り込んでしまう。母性の救済という会は擬似的人生を捨て真の欲望に立ち直らせようということを説く。多くの人が擬似的な生き方をしていると警告する作者のたくらみは成功している。

「隣人」は現代社会の問題点を作品の中にちりばめながら温かい人間性で包んでいる、ヒューマンな作品である。老人の孤独死、子供の虐待を小さなアパートで暮らす人々に当てはめ、主人公の木島とアパートの大家の金子が連携プレーでそれらを明るい方向へ導く手法は人情味あふれる作者の人柄ではないかと想像してしまう。とかく、文学は人間の暗部に迫りがちであるが、このような人間の善性を前面に押し出す小説は貴重であるし、もっと書いて頂きたいと切望する。

「ダルニーの瞳」は、かつての満州で終戦を迎えた美也子の避難民として生きる生活を描いた作品であるが、不思議に暗さがない。それどころか大連の街並は作者の望郷でもあるのか、終戦で混乱しているはずだがどこも美しく輝いているように見える。避難中に父とはぐれるがそのこともあまり悲壮にはならない。そして、美也子の美しさだけが正文の存在で浮き出ており、終戦を扱っているが恋愛小説として屹立している。

「お願いですから」は、三年前に妻のかなえを失くし、五十の出戻りの娘と暮らしている老人の切なさがひしひしと伝わる良い作品で、私はこの作品を当選作にしたいと決めて選考に出向いた。幸いにして他の選考委員の方の好評も得て、まほろば賞を受賞できたことはほんとうに嬉しいことである。この作品に華々しさはない。幼なじみとのたわいのない会話、喫茶店でユキちゃんの太くて白い足を見て人生っていいなと思うなど平凡な日常の描写であるが、その捉え方こそが一流品であり老境を見事に表現している。そして万引をしてつかまったときに「お願いですから」とあやまり倒して許してもらうが、実はこの老人はまるで残された時間をも万引したように生きていることを詫びているようで痛ましい。交通事故を起こした時もぶつけられた老人が「お願いですから天国へ行かしてください」と頼みこむ。もはや生きる活力も希望も失った老人は車にとび込んで天国を得ようとするが、それすらも叶わないというやるせなさに、この小説の奥行きの深さを見た。

「アフリカの弦」――総合商社に勤める修平は、内戦に巻き込まれナイジェリアからの帰国を拒んでいる江島亜優を帰国させる社命でナイジェリアに向かい、アフリカの置かれている現状と江島の身の上に起きた事の重大さに悩む作品であるが、私には伝わるものが少なかった。国境なき医師団が紛争地帯で懸命な活動をしてはいるが、現実には新たな紛争が起き犠牲になる女性の悲劇も繰り返されているという無力感に焦点を当てているわけでもなく、江島亜優の苦悩を掘り下げるのでもなく、江島と修平の関係が発展するわけでもなく、アフリカという国の抱える大きな問題を見せつける筆力には舌をまくが、もっと違う書き方があればより堅牢なものになると思った。江島と修平の恋愛を密かに期待していたが、残念ながらその芽は伸びなかった。

「ラスト・マン・スタンディング」――主人公の桜井大樹は原発事故を発端として一家がバラバラになり、かつて遊びに行ったことのある別荘で生きてみようと決め、自転車で三日間をかけて辿り着く。そこでは家族の帰りを待ち、独りで農地を守っている老婆がおり、セイタカアワダチソウを刈り取り地をたがやすという徒労に思える作業を続け

魅力溢れる秀作が揃う

五十嵐勉

いがらし　つとむ

1949　山梨県生まれ

早大文芸科卒

79「流謫の島」群像新人長編小説賞

84-90 カンボジアを中心に東南アジアを取材「東南アジア通信」編集長

主著『緑の手紙』（読売新聞・NTT　プリンテック「インターネット文芸」最優秀賞）・『鉄の光』「ノンチャン、NONGCHAN／聖丘寺院へ」「破壊者たち」

ていたのだった。原発事故で家族は新天地を求めて去ったが、老婆は家族がいつでも戻れるようにと作業をしていたのだ。大樹はいつしか老婆を手伝うが、元妻に出した手紙は受取拒否で戻ってくる。しかし、老婆には新天地で家もできたから来るようにとの知らせが届く。独りになった彼はこの農地と格闘しようと思った所でこの小説は終わる。骨太の筆力と原発問題を扱ったいい作品になっている。放射能を軽く見ている部分もあるが、現代の大きな障害に光を当てようという態度はたくましい。作品を作者の内側で充分練る作業はもう少しあった方がいいのではないだろうか。大きく羽ばたける脚力の強さを感じる。

今回のまほろば賞は九州から二作、関東から二作、中部から一作、近畿から一作とバランスよく全国的な秀作が揃った。題材もバラエティに富んでいて、それぞれに魅力や読みどころがあり、前回とは異なった意味の充実を示していた。最後の投票で蓋を開けてみると、評価がずいぶん散らばり、推す作品が割れてしまった。選考会で、このようにバラバラな結果となったのは、実に初めてのことで、これは何よりもそれぞれの作品に魅力があったということだろう。何を気に入り、何を押すか、選考委員ごとに違っていたということにほかならない。今回から持ち点制ではなく、五点満点という評価でそれぞれの作品に評価を与える形にしたことが、よい結果を生んだのかもしれない。

最後に同点で高得点だったのは、「お願いですから」（堀井清）と「アフリカの弦」（寺井順一）だった。例年だとここで決戦投票をするのだが、あえて一作に絞らず、二作同時受賞でもいいのではないかと提案したところ、全員の同意を得られたので、二作同時受賞に決定した。三番目に獲得点数が高かったのは「隣人」（河内隆雨）で、各選考委員から満遍なく点数が集まって、結果的に高得点となり「河林満賞」に題材もふさわしいということで、その賞が贈られた。また四番目の「擬似的症候群」（小河原範夫）は、中上紀選考委員が満点を入れていたため、この評価は得難いことから「中上紀賞」を贈ることにした。

「まほろば賞」の「アフリカの弦」は、昔の恋人がアフリカから戻ってこない商社の海外派遣を舞台にしていて、その筆致と緊迫度は群を抜いてスリリングであり、その恋人が反政府ゲリラに強姦されてエイズになってしまうという設定の衝撃性は読者を否応なく流れに引き込んでいく。文章も緊密で、描写も優れている。アフリカでチェロを弾くというシーンも悲劇と哀愁を奏でていて美しい。テーマを含めて抜きん出ているように思ったが、ただ、この男性主人公が、亜優という女性を愛しているとき、生涯の伴侶として引き受けるのならば、エイズそのものを恋人の肉体としてどう引き受けるのか、そのことについての懊悩がいっさい触れられていないことに、私は疑問を抱いた。その覚悟がなくて、日本に連れて帰るのには、説得力が欠けるだろうし、恋愛としてのドラマ性は低くなるように思った。そのことは選考委員の間でも議論になり、中上選考委員からは「エイズ患者と結婚して避妊具を使うことで愛情を確かめ合っている」実例もあるとの意見が出た。ただ、その欠落を差し引いても、何か捨てがたい文学的魅力があることは確かで、欠陥に目を瞑って評価するのも一法だということに落ち着いた。男性に最初から訣別の覚悟があり、エイズ撲滅に一生を捧げる女性への鎮魂歌だという見方もできるだろう。とにかく、この小説の持つハードボイルドの文章には魅力があるということを三田氏とともに評価した。

同じく「まほろば賞」の堀井清氏「お願いですから」は、老人の死に近い日常での現実感の希薄化となお生に執着するまだら模様がよく出ていて、一つの文学的領域をよく切り開いている点が評価された。万引きやひき逃げが日常との危うい境界をよく出入りしていて、現実の足元を崩していく。その領域がどんどん広がっていくことが、死を近くにし、向こう側への接近を自覚させる。「お願いですから」という言葉には、「死にたいのですから止めないでください」という願望も込められていて、彼岸はすぐ近くにあるものとして迫っている。しかし一方では、まだ生きたいと生に執着する気持ちも生々しく残っている。娘に再婚の話を聞かされて、自分のこれからが急に心配になるそのまだら模様の激変も、生のありありとした姿を浮かび上がらせてくる。ありそうでなかなかないこのリアリズムは、文学の新領域として、たしかにもっと評価されていいだろう。

「河林満賞」の河内隆雨氏の「隣人」は、アパートで暮らす隣人たちの人生模様が豊かに絡まり合って、温かい気持ちにさせられる作品である。それぞれが善意に満ち、困難や労苦を乗り越える方向に助け合うそのドラマが人間味と優しさに溢れている。ここに筆者のヒューマニズムが溢れていて、それに救われる気持ちになることが評価された。現実にはこんな人間臭いアパートは存在せず、もっと殺伐としていて、隣には無関心、無干渉というのが現実なのだ

ろうが、それを超えて理想の形、あるいは古き時代の助け合いの精神の生きている場として現代に提出しているのは、かえって新鮮な気もする。

「中上紀賞」に輝いた小河原範夫氏の「擬似的症候群」は、題材もストーリーもおもしろく、読ませる力量は相当なものだとあらためてその卓越した文章力に注目した。きめ細かく、言葉の緊密さは高く、長く文章を練り上げてきたことは、文体の説得力の強さが証明している。人は確かに、人生で後ろめたいことを犯している。その心理的な負い目に対して働きかけてくる巧妙な言葉の誘惑は、拒否することができないある浸透力を持って迫ってくる。密度の高い文体によってその世界を構築しえたことは、賞賛に値する。ただ、私としては最後に、数字的にいくら寄付したのか、知りたかった。その数字によって主人公の気持ちの持ち方も差があるはずである。小河原氏は、これだけの文章力を持っているのなら、現代に潜むさまざまな心理の罠の世界をもっと書いていけるはずのように思う。今後どういうものを書き拡げていくのか、注目したい。

優秀賞に留まったが、「ダルニーの瞳」（朝川彪）は、旧満州の大連の終戦当時のことが、主人公の女性の内面を通してよく書けているという点は評価された。そこにある確かなものは、何よりも郷愁であり、過ぎ去ったあの時代を懐かしむその思いがリアリティとなって紡がれている。中国人に身を売る女性の頽廃的な気分も哀愁を奏でている。

しかし選考委員の間でも問題になったが、相手が中国人であることをどうしてもっと早く知らなかったのかというストーリー上の矛盾が傷になっており、それを庇い切れない齟齬が残らざるを得なかった。戦後間もない時期、一九四五年という時期に中国共産党の青年がそれだけ満州で大きな力を持ちえたか、という疑問以上に、女性主人公が、日本語のうまい中国青年をかなり長く日本人青年と思い込んでいるその食い違いの不自然さがどうしても払拭できなかった。しかしながら、満州への郷愁の面を高く評価し、六篇中最もよいものとして強く読者賞に推した方もいた。読者賞という番外の評価を得たことを喜びたい。

野川環氏の「ラスト・マン・スタンディング」は、放射能汚染の地で再出発を意図する男の話だが、放射能汚染に対する認識があまりに甘く、こんなことで暮らしていけるのかと疑問に思う点が何カ所もひっかかった。野川氏は、時代の先端の領域に題材を求め、それなりにストーリーを組み立てていく力量は認めるが、放射能汚染のようなあまりにも大きすぎる題材を選ぶには、準備が足りないように思える。腰を落としてしっかり取り組むことが必要だろう。とくにこういう原子力が絡んでいるような問題は、その勉強をするだけで数年かかるはずである。軽率な取り組みは、筆を浮薄にするだろう。題材を選ぶ眼には鋭いものがある

だけに、自分の力をうまく生かす題材に巡り会うことを願っている。また同時に一つの問題に対し、何度も、じっくりとアプローチする根気も持ち続けてほしい。

なかがみ　のり

1971　東京生まれ
ハワイ大学美術学部卒業
99『イラワジの赤い花 ミャンマーの旅』（集英社）を上梓
同年『彼女のプレンカ』（集英社）
ですばる文学賞受賞
『悪霊』（毎日新聞社）『いつか物語になるまで』（晶文社）『夢の船旅―父中上健次と熊野―』（河出書房新社）『アジア熱』（大田出版）『シャーマンが歌う夜』『水の宴』（集英社）『海の宮』（新潮社）『熊野物語』（平凡社）など著作多数

老いた男の願望と妄想と幻想と現実

中上　紀

毎年のことであるが、まほろば賞の候補になる作品の文字の間から浮かび上がる磨き抜かれた筆の力と、テーマの切実さに圧倒される。六作、どれも素晴らしかった。特筆すべきは、半分が、高齢者を描いていることであった。高齢化社会の表れというよりは、真の小説の意味を問い続ける書き手と、それを受け止める読者の年齢が上がったということか。

まほろば賞を受賞したのは「お願いですから」と「アフリカの弦」だ。そして、「お願いですから」も、老人の物語である。八十歳の語り手は妻を亡くし、五十の娘と二人暮らしである。「お願いですから」とは、語り手がスーパーで万引きをした際に許しを乞うた時の言葉であると同時に、車に体当たりしてきた老いた男が、天国に行きたい、死なせてほしいと頼んだ際の言葉でもあった。老いることの孤独と悲しみが、そこには描かれる。死にたい男に語り手は自分自身を重ねる。自分も死んで天国に行きたい、人を殺したらどうなるのか、美しい女を犯したい、といった、とめどない願望と妄想。そして幻想。だが、突然突きつけられた娘の結婚話に、一人で「生きていく」という、考えても見なかった現実が一気に立ち現われ、途方に暮れる。ラストの、その絶望感が良かった。また、カッコなしのセリフが曖昧にする現実と非現実との境界は、さながら老いと共に様々な機能に変化が出てきた主人公の脳内を表しているようでもあり、引き込まれた。

「アフリカの弦」では、地球規模で展開する商社の海外事業部に属し、スーダン、ナイジェリアなどの最前線で勤務する男女が経験したショッキングな出来事に焦点が充てら

れつつ、人間であることのやるせなさが突きつけられる。根底に響くのは、「北半球の音楽家たちが作り上げた正当な楽曲の調べ」ではなく、執拗に迫ってくるタム、タム、タターンというアフリカのリズムである。それが、何をどう癒そうとも逃れられない世界の現実でもあることを、読者である私たちは、語り手である修平の目の前で少年が脅されて自らの母親の腕を打ち抜く光景や、「狂気の人間でさえなかった」ゲリラの男に凌辱されエイズに感染させられた亜優の叫び声から、知るのである。相思相愛であるという男女の関係性が曖昧にしか描かれていないことが、かえってフォーカスすべき問題をクリアにしている。ただ、一女性読者として、修平にはすべて知った上で亜優を抱いてほしかった。あるいは、亜優が、いや、女性たちが救われないのも「現実」なのか。

「河林満賞」を受賞した「隣人」は、六作品の中で唯一涙が出そうになった作品である。壁の薄いアパートに暮らす人々の人情のあるやりとりが、スマホやインターネットに塗れ、人間同士が触れ合うことが少なくなった時代に暮らす我々に何か懐かしいものを思い出させてくれる。また、この作品で扱われている子供を放置する女性の話は、数年前の大阪で起きた二児放置死事件に題材を得たと思われるが、そうしたやりきれない出来事に溢れる世の中に救いを与える小説だと思う。他人の家の鍵を勝手に開けることは出来なくとも、気にかけて、いざという時は行動に出る。隣人とはそういうものだという声が聞こえた。

「擬似的症候群」は、私個人的に大変印象深く面白く読んだ作品だったと言ったら、五十嵐勉氏が「中上紀賞」としてくださった。海野は現役を引退した男であるが、彼が一人暮らしするアパートの真上の部屋に引っ越してくるのが水守透という「男オンナ」である。この、部屋に女性たちを呼んで何やら怪しげな宗教めいた「母性の救済をはかる」商売をする、多分にインパクトのある人物とのやりとりで、ストーリーは進んでいく。女性を紹介されて結婚話も進むが、やがて海野は、水守は自分が過去に捨てた女の息子ではないかと疑うようになる。この物語が、真実がはっきりしないまま終わることに一種の快感のようなものを覚えた。それは、母子を傷つけた後悔の中生きている海野を、小説が簡単に許さないからに他ならない。それに、真実など、本当はどうでも良いのである。女の息子に、海野は自分勝手な理由からひそかに虐待をしていた。にもかかわらず、母親の男に苛められ、また自分に捨てられて苦しむ母親を見ながら育ったあの子は、将来どうなるのかと、これまた自分勝手に心配していた。水守は、そんな海野の歪んだ夢のような疑似的息子だった。海野は水守に入会のための金を払い、その後水守は「神婦」職を海野に託すと言って突然目の前から去る。振り込め詐欺か、振り込め詐

欺を装った水守の復讐か。疑う海野であったが、それならそれで、「擬似的」に罪を償うことが出来ると自分を納得させる。だが、本当に「藁の会員」の女性たちは集まってきた。海野が彼女たちの「母性の救済」に使命感を燃やすという不気味なハッピーエンド感が後を引く作品だった。

「ダルニーの瞳」では、戦争直後の大連に居た女性が描かれる。主人公を含めた登場する女たちが、皆地に足を付けて自分で歩いて行こうとしているのが良かった。

「ラスト・マン・スタンディング」の一面のセイタカアワダチソウは、夢に出てきそうな光景だが、現実にあるのかもしれない。それを延々と引き抜いていく。シジフォスの神話を思わせた。

まほろば賞選考会風景　2018.11.4 大田区民プラザ会議室で

読者賞

「ダルニーの瞳」朝川彪

寸評・感想

●「ダルニーの瞳」について。女性の感性を借りた大連への郷愁を描いた作品は、文章の運びが巧く見事な作品に仕上げている。　木内是壽

●「お願いですから」の老年の心のぼんやりしていく様はよく描かれている。死の近い老境の内面がリアリティを持って伝わってくる。　渡辺正樹

●「アフリカの弦」の題材は新鮮で、劇的なシーンは迫力満点。最近の芥川賞作品などよりはるかにいい。　広瀬道子

●「擬似的症候群」は、現代の新興宗教の側面を、現代人の心の裏側から覗くようでおもしろい。読ませる書き手だと思った。　渡辺えり

●「隣人」の底に漂う温かさに、心が救われる。現代は不毛や無関心ばかりではなく、血の通った人々の集まる場があるということに安心感を覚えた。これからもがんばって書いてほしい。　匿名希望

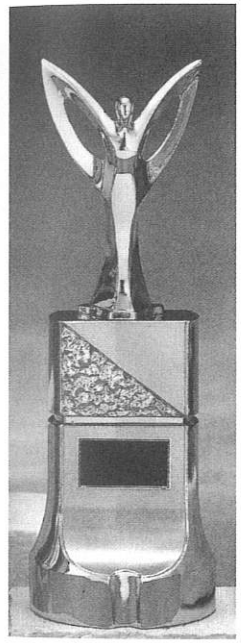
河林満賞の移設について

河林満文学賞は、二〇〇八年一月十九日脳出血で急逝した作家・河林満を偲び、その文学への情熱と創作にかける志を遺す意を込めて、御遺族の寄付を基に、二〇〇八年十二月十日に創設されたものです。故河林満の文学への熱情と響き合う、優れた小説作品・創作活動への顕彰とさせていただきます。

贈賞作品はこれまで銀華文学賞に応募される小説作品を対象にしてきましたが、銀華文学賞の中断によってまほろば賞のなかに組み入れられることになりました。同人雑誌の優秀な作品に贈賞され、受賞者には賞状、記念品、賞金五万円が授与されます。

この賞によって、たゆまず小説創作に情熱を燃やす方々に光を当てることができましたら幸いです。

作家集団「塊」／文芸思潮



第12回 まほろば賞　読者賞　投票集計

作品名 / 投票者	擬似的症候群	隣人	ダルニーの瞳	アフリカの弦	お願いですから	ラスト・マン・スタンディング
渡辺えり	10					
川崎芳子		10				
山田浩美				10	5	5
立石工事	10			10		10
野上　元		10				
横田一美					10	
岡田一法				20		
田上秀一		10				
山田邦雄			20			
齊藤和明					10	
持田義人		10				
里見風樹					10	
関田忠弘		10				
田代浩一	10					
田中頼夫					20	
米山孝太郎				10		
寝村恵子			10			
伊藤正樹			20			
木内是壽			50			
木田明雄	20					
石山幸治		20				
計	50	70	100	50	55	15

まほろば賞は、3年前から読者賞を設けました。読者からの寄付金に加えて感想投票をいただき、その合計点数の最高点の作品に読者賞を贈ります。今回は上記の集計のような得点となりましたので、ここに御報告いたします。寄付金合計金額57000円を得票に従って配分し、各著者に贈らせていただきます。おかげさまでお寄せ下さる方も増えて参りました。これが大きく発展し、多数の方が参加して下さることを期待しております。

全国同人雑誌振興会

まほろば賞は文学を愛好する皆様からの御寄付によって成り立っております。志ある方の御支援をお待ちしております。

まほろば賞　受賞の言葉

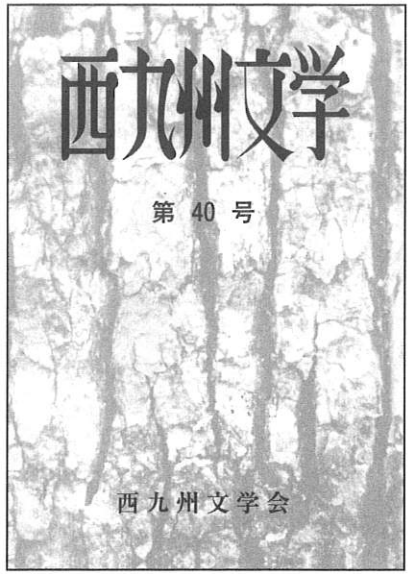
寺井順一

介護退職から七年が経って自ら長期の入院治療が必要となった。「西九州文学」の発行者を引き受けたばかりで身の回りのことに手を焼いていたところ、五十嵐勉編集長から「優秀賞」に決定とのお知らせを頂戴した。西九州の地から、これまで以上に力の籠った作品を「発信」したいと考えていたので、心底うれしかった。さらに、この度は最優秀賞「まほろば賞」まで頂き、審査員の皆様に深く感謝申し上げたい。

同人誌の発行は、毎回新しい個性や変貌してゆく個性との出会いがあり、胸がわくわくする体験である。特に長崎には、原爆とキリシタン弾圧という深く重たいテーマが横たわっており、何作か書くうちにその二つのテーマがおのずと頭に浮かんでくる。「西九州文学」には多様な書き手たちの蓄積があるばかりでなく、その蓄積の継承と新たな「発信」を行うパワーがある、と信じている。

寺井順一

てらい　じゅんいち
1954年生まれ
早稲田大学第一文学部ロシア文学科卒業
長崎県大村市在住
同人誌『西九州文学』
発行者
2017年『静かな隣人』で
第32回長崎県文学賞受賞



まほろば賞　受賞の言葉

堀井　清

小説を書き始めたときから、小説とは何かと考えたはずです。それから何十年経つのか。いまもまだ考え続けています。しかしこの歳になって、ようやくひとつの答えを見つけたように思っています。

小説というのは、この世における一切の物事の、本当のことを探す行為であると。しかし、本当の文学などこの世に存在しないのだとすれば、同様に、この世のことに本当のことなどひとつもないのでしょう。

私は江夏美好さんが創刊した「東海文学」の発刊時から参加させていただき、それに続く「文芸中部」一〇九号まで沢山の仲間に支えられてここまで書き続けることができました。そうしてこのたび同人雑誌優秀作にご推挙いただき、さらに「まほろば賞」をいただきました。こんなにうれしいことはありません。いま時代は、文字離れしているのでしょう、このような時に拙作のようなものが、この貴重な賞をいただいていいのかどうか分かりません。もっと力強い作品でなければいけないのではないかと余計なことを考えています。そんななかで私の作品を発見して下さった関係者の皆さんに心から感謝申し上げます。

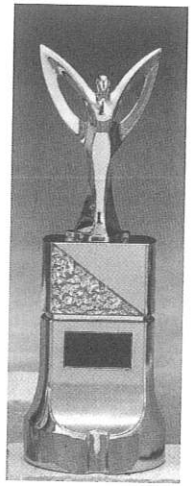
堀井　清

ほりい　きよし
1936年生まれ
江夏美好氏主宰の「東海文学」
に創刊時から参加、その後現在の
「文芸中部」の編集同人
「中部ペンクラブ」に設立時　から
会員・現在理事
1983年3月号「文學界」に「光のいれもの」が同人雑誌優秀作として転載
1998年第11回・中部ペンクラブ文学賞に「さよならの年月」が受賞
岐阜県多治見市在住

河林満賞　受賞の言葉　河内隆雨

この度は「隣人」に河林満賞を賜り、誠にありがとうございます。文芸思潮第69号に同人誌優秀作品としてに掲載されたことも望外の喜びでした。しかし、まだまだ未熟な作品だと感じております。「予定調和的にハッピーになり過ぎる。現実にはもっと深刻な問題が無数にあると、異を唱える人もいるだろう」と言う指摘をいただきました。従来から中々こうした壁が超えられず、安易に流れる欠点を痛感しております。そのうえで、嬉しいことにヒューマニズムを買いたいとの評価もいただきました。少しでも読者の心に届くものがあると言って頂けるならこれ以上の励みはありません。今後とも精進していきたいと思います。

この場をお借りして文芸思潮の皆さま、あべの文学の同人の皆さまの指導鞭撻を深く感謝いたします。



河内隆雨

こうち　りゅうう

本名　河内隆（こうちたかし）

1949年生

兵庫県西宮市在住

現在市役所臨時職員

90歳母と二人暮らし　あと猫三匹

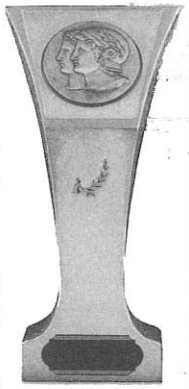
2015年9月より「あべの文学」同人

17年2月　あべの文学24号に発表した「合鍵」が神戸新聞、図書新聞、樹林等の同人誌評に取り上げられる

中上紀賞　受賞の言葉　小河原範夫

同人雑誌『ガランス』の会に入会して作品を発表し続けて二十年近くになりますが、今回の全国同人雑誌最優秀賞（中上紀賞）の受賞は、ガランスの会にとっても、私個人にとっても、たいへん意義のあることと受けとめています。文学や芸術へのやみがたい思いを抱いて集まった会員仲間との文学・芸術論議がなければ今の私の創作活動はなかったものと思います。仲間たちとの真摯な意見交換や根掘り葉掘りの批評や次作への過大な期待感がおたがいにとって創作の肥やしになっているのは事実です。今回の受賞作もそうした仲間たちとの知的なかつ精神的な交流に支えられてできあがった作品でした。

社会があらゆる領域で情報化が進み、システム化の度合いを強め、一方で人間関係が閉塞化・蛸壺化していく状況下で、十人程度でも志を同じにする仲間が集うと、肌感覚のコミュニケーションが図られ、相互啓発の場が得られ、人間の真実の声を発信していくチャレンジングな母体が形成されます。今回の受賞を心の糧として、私たちの『ガランス』の会をさらに発展させ、全国同人雑誌振興の一翼を担いたいと希望に燃えています。拙作を取り上げて評価していただいた皆様に、心よりお礼を申し上げます。



小河原範夫

おがわら　のりお

1945年生まれ

北九州市在住

九大経済学部卒業後、会社生活四十三年を経て、現在無職

同人誌『ガランス』編集長

創作のかたわら地域活動に従事

カオス 23号

ダルニーの瞳

朝川 彪（あきら）

浜辺にて

眼がさめてすぐにまぶたを閉じたくなるのはこの部屋が白い色で塗られているから。見上げる天井も壁も、棚に乗っているただ一個のビーナスの石膏もチョークのように白い。白という色がこんなに私を苦しめる色だとは考えていなかった。そして眼がぱっちり開かないうちに私はもう悲しみの涙を流している。泣いているだけでは事態はよくならないことはわかっているけれど昨晩も夜通し涙を拭いていた。でも泣けるうちは絶望もまだ極限ではないと思う。こんなとき熱い珈琲の一杯があったら素早く起き上がる力も出るだろうが、いま部屋にはただのお湯さえも沸いていない。

以前哈爾濱（ハルビン）のキタイスカヤ街で飲んだ珈琲はよい味がした。香りもよかった。その茶館には父が案内してくれたのだった。キタイスカヤの夕暮は空が黄金色に輝き、敷石の道をゆくロシア人の影が長くのびていた。父はあの時ハルビンの珈琲はヨーロッパから入荷するということについてながながと講義した。父は娘の私からみても風貌がよく、ダンディで、嗜好品のことについてもうるさい人だった。そんな人のことをエピキュリアンというのですって。なつかしい父。

朝、私は起き上がり、のろまな感じで時間をかけて外出する支度をした。それからロッキングチェアに腰かけて窓から見える景色を眺めていた。

アカシヤが繁る赤い岩の丘のむこうに海が見える。午前の海は銀色に凪ぎ、小舟の影もなく冷たく私にそむいているようだった。

きのう、この洋館の一階に住む大学生の高治（こうじ）さんに連れられてあの海を見に行った。洋館のロビーで私が一人堅いロシアパンをかじっていた時、気分が晴れるから海岸に行きましょうと誘ってくれたのだ。

地図をひらけば渤海と記入されている小さな湾なのに、実際の海はやはり広くて、背の青い魚を隙間なく並べたような海原の彼方に立ちあがった積雲の頭が純白に光っていた。

「高治さん、御覧なさい、雲がまだ夏の形をしているわ」

私は言った。横に並んで立った高治さんは空を仰いでうなずいた。海では水平線や雲を眺めて静かにしているのが似合う、まじめで深くもの思う感じの方（かた）である。

「僕が中学生のころ夏季訓練に来た海です。水温はまだ真夏と同じですよ。一緒に泳ぎましょうか」

と言う。でも私は、

「それはだめね。わたし知らない海には入らないのよ」

と、ことわって波が自分の足の甲を洗う浜辺で脛を出して立っていた。

九月になって栄養失調の状態からやっと良くなってきたのに、泳ぎなんぞで力を浪費したくなかった。それに日本が敗れた今、満洲在住の日本人が食べるものもなく自分の身を助けるのに精いっぱいの有様のなかで、海に泳ぎにくるなんて酔狂にすぎる。

高治さんは旅順大学の工科二年生で、旅順市が満洲の他の都市と同じようにソビエト軍に占領されて大学が閉校になり、この大連に逃げ帰ってきたそうで、毎日が焦燥の日々だとか。しかし自動小銃や機関砲をうちまくりながら戦車で進撃するソビエト軍に追われてハルビン市を出発し、最後まで一緒にいようねと約束した父ともはぐれて大連駅に倒れこんだ。それを助けてくれた人民政府工作員の雅文（まさふみ）さんに身をささげたお礼に生活の保証を与えられた私の、ずたずたになった心に比べたら、高治さんの悩みは他愛ない少年の悩み。

私が黙って水平線をながめていると、高治さんはそばに来て、

「この海は渤海、それから黄海、そしてその先は九州です。美也子（みやこ）さんは早く東京に帰りたいでしょうね」

と言った。

「それはもちろんよ」

と私は答えたが、私と同じ年齢とはいってもなにか幼さの残るこの人に自分のことは何も話してなかったし、彼を

相手に母のいる東京に帰るためにこんなに無理しているのよ、と説明することもめんどうで、ただ笑っているほかはなかった。でもこんなに素ッ気ない女のことを理解してくれたのだろうか、高治さんはそれが自分の問題であるかのように唇をかみしめて足もとの砂に眼を落としているのだった。けれどまさかあなたは白日夢を見ているような私と雅文さんの時間については知らないだろうし、もし知ったならきっと私のことをさめた眼で見るようになるし、そして私が嫌いになる。それでいいわ。

夕暮になって紺碧の空には初秋にふさわしい羊雲の群があらわれ、海はますます瑠璃色に輝いた。

高治さんと帰途につくとき、砂浜に続く草原を歩くと道ばたに生えたネコジャラシの穂にそこだけ夕陽があたって風に揺れていた。それが淋しくて、そばに人がいなかったら私は草原に倒れて泣いただろう。

海を見ていてそれだけの事を思い出した。

満洲に来た理由

立ちあがって窓のカーテンを閉じるともうする事はない。ドアに鍵をかけて一階に降りた。階段の踊り場の窓からガラス越しに木洩れ陽が射して私の顔にもあたったが、それにはもう暖かみが感じられなかった。秋が来たのだ。ダンスパーティができそうな広い一階のロビーから玄関に出て、体ごとぶつからなければ開かないほどの重い扉を押して私は街に出た。

往来に出るまでは長い中庭の道。庭には楡の大樹がぎっしり並んでいて、その高い梢が次々に揺れはじめるので風の渡って行くようすがよくわかる。楡は落葉樹だからかれらはもう夏には未練がないらしく雨のようにわくら葉を散らせて、ばかのように口をあけて空を仰いだ私の肩にも降りかかるのだった。

臥龍台の坂をくだって雅文さんの公寓がある南山方面に歩いてゆく。

メインストリートに並ぶ商店の飾り窓に女の歩くすがたが映っている。あれは私だ。私が映っている。大柄で長い手や足をし、活気があって背すじがすっきり伸びている。いつであったか母があなたは洋服がよく似合う、と言った。

学校の運動会で校庭にクラス全員が並ぶときは、私が一番背が高かったので最後尾の位置になり、ふり返ってももうだれもいず、他の子のようにうしろの友達とふざけることもできなかった。そして別のクラスの一番大きな子たちが私の左右にいて、つい顔を見合わせてしまい、思わずプッと笑ってしまうのだった。私は大きな自分がいやだった。先生はそんな私のところに来て皆の面倒をよくみてくれ、と言うので、級長でもないのにどうして私に？　と聞くと、

おまえが頼りなのさ、との答えだった。それには私にも心当りがある。学友からお姉さんと呼ばれていたのは態度が人よりもおとなびていたからだろう。

三年前洗足高女を卒業した春に鉄道会社の大連市の沙河口工場に赴任していた父の勤務地に遊びに行き、ハルビンに移って一年間を過ごした。遠くに出かけることを躊躇う母が、女は未開の土地に行くものではないと叱るのをホンの半年だけよ、となだめて出発してしまったのだった。父がよこした絵葉書には、お互いを結んだ何千本のテープをふりはらっていましも岸壁を離れようとする日満航路の巨船の華々しい姿があった。またキキョウの花の群生する晩夏の大興安嶺の写真もあった。

北満の都会での、父と社宅の人々と土地の雇人たちとの暮しが続き、仕事で鉄道沿線の各地に出張する父について旅行したこともある。冬になると市内を流れるスンガリー河が凍ってスケート場になるので、スポーツ好きな私は競走用のスケート靴を買ってもらって痛快に滑った。そのころ満洲に来ていた日本の子供たちの間ではやっていた歌が私も気に入り、氷上でこけては起き、起きては転びながら、

寒い北風吹いたとて
おじけるような子供じゃないよ
満洲そだちのわたし達
寒い日には外に出て
みんなでしましょうスケートあそび
満洲そだちのわたし達

と歌っていた。

こんな幼稚な歌を歌うには少し歳をとりすぎている、と思わなくもなかった。仲のよかったヒロシさんという少年がはじめての私のコーチ役だったが、間もなく私は彼よりスピードを出せるようになった。あれから彼はどうしているか。別れに挨拶もしていない。

学校時代には日々伝えられていた戦捷のニュースは私が大陸に行ったころから悲劇性を帯び、先行きむずかしい戦争だと思わせるようになった。しかし国内に住んでいればその実感があったかもしれないが、こちらでは空襲はないし、関東軍の守りは堅いし、と戦時の緊張感もいつかゆるんで放恣な生活をしていた。東京ではアメリカの空襲爆撃が激烈となり、碑文谷のわが家も危くなったので、母は群馬のおばあ様の家に疎開されたとの知らせがあった。

はるか南の戦場での戦闘は空中戦画報の挿絵として男の子たちが見るものにすぎなかったし、支那戦線に慰問袋を送ると御返事としてその兵隊さんが進攻した村からとりあげて来たらしい鶏をぶらさげてにっこり笑っている写真が送られてきたりして、私の臨戦気分はうすかった。

だから去年の八月九日、ソ連の大規模な機動部隊が満ソ国境を越えて南へ攻め込んだ情報が流れたことは私達に

とって晴天の霹靂だった。

あの日からハルビンを去る日までの混乱と、すでにダイヤ通りに走らなくなった列車に身を投じて満鉄線を南へ揺られた四日間の恐怖をいまここで語ることはできない。今は書けない。それは父との永別の瞬間を語らねばならなくなるからである。たった半月の間に起きた秩序の崩壊と混乱と父の死が、快活だった私を灰色にした。あの日以来私は疲れ、孤独になり、笑わない人間になったのだ。

しかしあの飾りガラスに映っている女はあまり悲しそうではない。私が努力して笑顔をつくるとガラスの中の私もやさしく微笑む。

戦車

むこうから一台の戦車がやってきた。街路を歩いている私はその戦車と向き合ってしまう。

ソ連軍の戦車の強さや性能は図抜けていて日本軍の戦車は比べものにならない。私がこの都会に逃げてきたとき彼等の機動部隊はすでに町のアスファルト道路に鋭いキャタピラーの跡を残していた。ソ連軍はたった十二日で満洲南端の大連市に侵攻した。

市内電車ほどもある巨大な戦車が砲塔をぐるりと回して機銃の黒い銃口をこちらに向け、小さな私に狙いをつける。乗員の若い兵士が遊び半分に砲塔をまわしているのだ。けれど私を撃たないという保証はない。私はふるえあがってすばやく横町に曲がって彼等の前から隠れた。こんな異国の道ばたで撃ち殺されるなんてあんまりみじめだ。情けないけれど逃げるのは上手になったと思う。

私は横町の中国人街にかけこみ、そこに止めてある荷車の陰に隠れて表通りの方を注意した。今日はスカートをはいてきて、というよりそれ一着きりなのだけれど、そのために自分の足が露出しているのを悔やんでいた。横町の道幅だけの視野を、戦車とそれに続く幾人かの兵士が通り過ぎた。私に気付いていないようだった。足もとに茶色の鶏がやってきて、いつでも逃げ出せるように腰をひきながら横目でこちらを見ている。そして喉を鳴らした。

私はやっと納得して表通りに出て行った。

今、大連を占領しているソ連軍は、十八年に欧州のスターリングラードの戦いでナチス・ヒットラーの軍隊を降伏させた勇猛な部隊で、人を殺すなど何とも思わない輩だから、昼間でも邦人の婦女子は決して表に出てはいけないと、旧隣組の組長さんだった方が先日も私の住む洋館に見えてお話をされたということだ。

家の中に侵入されたり貴重品を奪われたりはまだよいほうで、暴行をうけてそのうえ殺される女性もいる。

このように残酷な行為に馴れてしまったソ連兵を見ると、

かれらが、ハルビンやその他の都市に零落して住んでいたあの心優しい人なつっこい眼をして遠慮ぶかげにふるまっていた私たちの友達である白系のロシア人と同じ民族の人間であるとはどうしても考えることはできない。よく考えてみれば白系の人々はロシア革命の時に追われた人々で、アジアに漂泊すれば日本人の被護なしには生きられないのであんなに温厚な顔をしているのだろう。そこへゆくとソ連赤軍のほうは日本人への野蛮な敵意に燃えている。

ガラスのマリア

雅文さんのアパートメントに行く途中に西洋式の墓地がある。それはロシア革命の時追放されて異郷のこの地で亡くなった白系露人の奥津城なのだ。文字通りその庭は丘の谷間の奥までのびた緑の深い、美しい場所で、白い碑と十字架が楓の葉のそよぐ中でちらちら見えている。

入口の鉄の門のそばに礼拝堂があって、仰ぐと青銅の屋根の尖塔が青空の中に浮かんでいた。楡の樹に半分隠れてステンドグラスがある。秋の陽の強い直射で外からではその模様ガラスは色彩を失っているが、堂の闇の中に入ればグラスを透かす光は華麗とも荘厳とも表現のしようのない美しさである。幼児イエスを抱いたマリアが真紅の上衣と青のガウンの装いで上智の座につき、足もとにはかわいい天使が二人ホルンを吹奏している絵柄だった。

いつであったか、その日も雅文さんの所に行く時だったが、私はだれもいなかった堂内に入りこんでそのマリアに祈ったことがあった。闇の中で輝くステンドグラスの向うには、なにか安息の約束があると思われ、それがもどかしくて追いかけて外に出てみると、亡くなった人たちの十字架が昼の光をうけている現実の風景があるばかりだ。ステンドグラスは光の魔術。マリアはいない。礼拝堂の裏にまわってみたら背の高い夏草がぼうぼうと茂る清潔な空き地で、コオロギが細々と鳴いているだけだった。

私は今日、そんな気もないのに出かけて来たことに後悔して、鉄門のそばに佇んで溜息をついた。今何時になるのか。避難列車のなかで腕時計をなくしたので時間がわからない。

むこうに聳える塔には、はるか高いところに黒い鐘が吊ってあり、午後二時になるとそれが打ち始める。大小の鐘の音色に高低の大きな差があって、それでこころよいハーモニーがつくられる。目測でまだ百メートルくらい離れていそうだが、あの鐘の下に行くまでに鳴り始めたら今日はこのまま部屋に帰ってしまおう。鳴らなければやはりあの人のところに行くわ。

私は朝からの迷いになお決着がつけられず、のろのろと鐘楼に近づいた。

避難民の私

劉雅文さんは、この町に樹立された人民政府の一人として政治に参加している人で二十八歳の青年である。政府はできても秩序が崩壊した都市にちゃんとした政策などあるとも思えないが、雅文さんは毎日忙しそうに活動している。日本人であるのに中国の人民政府に参画できるということが変だとも思うが、この人がよく口にするインターナショナルとは人種や民族の壁を超えた共産主義の理想が実行されるという意味なのだろう。この人と知り合って私はいろいろな事を覚えさせられた。

雅文さんの話によるとソビエトの占領軍が軍政を施く一方で中国人による大連市人民政府ができて、その保安隊が町の治安にあたり、またソ連司令部から命じられた日本人労働組合が大連在住二十万人の邦人の生活を左右する権利を与えられるなど、終戦後のこの都市の政治の複雑さを聞かされる。

しかし私は雅文さんのお世話になっているからそれらを聞くだけであって、満洲が崩壊しようと大連がどこの国の支配に移ろうと少しもかまわない。私の願いはただ日本に帰国することだけである。そして気分が乗らない時でも雅文さんのアパートメントに通うのはただこの望みのためである。

忘れもしないが去年の八月二十日に九五〇キロの行程を五日の日数を費やして列車で走り切り、大連駅のプラットホームに倒れこんだとき、私を助けて臥龍台にある部屋に連れてきてくださったのが雅文さんだった。

沿線での戦闘や暴徒に妨害されての南下で、同じ客車に乗り合わせた軍関係の人や父の会社の家族の方々に励まされたり慰められたりの行程で、ずいぶん力づけられたが、途中父の事件があって私は疲労の極に達していた。新京以南では列車が沿線の小駅に近づくたびに緊張し、車外に響く声におののいていた。公主嶺というところで、棍棒を手にした満洲人の男たちが停車した車内に乱入したので、これで私の命も終りかと座席に突っ伏して顔をかくしたまま身動きするのも恐ろしかった。そばを離れず一緒にいた父が新京を南に去ること百粁あまりの小駅で生死がわからなくなったショックで、私はしばらく通路のところで意識を失っていた。目がさめても、これが現実だとわかると死ぬほど苦しく悲しいので、むしろ車窓からレール際の暗い畑に飛びおり、雑草や石ころの上にたたきつけられた方が楽になれると思った。

私は避難者であふれている大連駅の構内を人に押されて歩いたのだろうがよく覚えていない。その時も意識がどう

かしていた。

気がつくと降車口の遊歩場に設けてある中世風の飾りのついた外燈にもたれ膝をかかえて坐っていた。芳紀二十一歳の女が、だ。

その時、うしろから私の肩に触れる手があるので振り向くと、褐色の背広を着た、背の高い青年が立っていた。国防服や軍服を見なれた眼に、背広姿の青年は新鮮だった。青年は濃い眉の下から私をじっと見て、

「あなたは日本人ですか」

と言うので危険なやつ、と思ったが、

「そうですよ」

と答えて青年を仰いだけれど、すぐに自分の顔が汗や埃で汚れているのを恥じて下を向いてしまった。青年は、

「とても大変でしたね。だれか、知り合いの人はいますか？これからどちらへ行かれますか？」ときく。

「満鉄の大連支社に行ってみます。父が社員でしたから」

「東公園町にある満鉄ですね」

「はい」

私が返事をしただけでなかなか起きあがらないので、青年はうしろから私の脇に手をいれて起こそうとしたが、私は手を振って触るなという合図をした。こんなに弱っていても得体の知れない男には体は触れさせぬ。

青年はきまりわるげに、

「それでは手につかまってください」

とか言いながら引っぱり起こしてくれたが、私は不機嫌にムッとしていた。私を立たせてどうするの？　助けてくれるとでもいうのですか。だが私は疲れていて自分の汚れた手をつかまれても羞恥の気持は湧かなかった。差し出した青年の腕には赤い色の腕章があった。

今から思えばその色はその後大連の街のいたる所に貼られた毛沢東という指導者の写真入りのポスターの色であり、人民政府の象徴である赤旗と同じ色だった。逃げてくる列車の中でも中共軍の人を害さない軍規が話題になったことがあった。だからこの場合その青年を信頼するほかはなかった。

その人が劉雅文さんだった。ちょうど一年前のことだった。

白い部屋

ハルビンの社宅を引き払うとき父は、「もし私からはぐれて一人になった時は大連支社に行きなさい。めんどうを見てくれる仲間は大勢いる」と言った。それが私の記憶にあったので雅文さんの問いにそう答えたのだ。

私たちは東公園町にある会社に向ったが、途中大広場のヤマトホテルの前で私がまた坐ってしまったので、雅文さ

んは通りかかった荷車を呼び止めてうまく馬方を説得して、荷車に乗せてもらうことにした。私は荷台に乗せられ積荷のトウモロコシの粉にまみれて運ばれた。

私たちは会社の正門のところへ着いたが、あたかも要塞のように堅固なロシア建築のビルヂングは黒い門をとじて人の気配もなかった。私が門の外で待ち、雅文さんが潜り戸から中に入ったが、すぐ戻ってきて、

「事情がよくわからない。今日はとりあえず引きあげる」

と言った。そして近くの商店からどこかに電話をしていたが、突然黒塗りの自動車が走ってきて私の前で停まったのでびっくりした。私はその自動車に乗って郊外の海の見えるあの家に来たのである。

その家は高台にある三階建ての洋風館で、日本企業のハイクラスの人の社宅だったとか。この広い屋敷に一家族住まいだったというから贅沢な暮らし。剣の先のような忍び返しのついた鉄の門、玄関までの庭には大樹の幹がならび、晩夏の風がざわざわと枝を鳴らして、私のために空けられた三階の小部屋の窓に木の葉がふりそそいでいた。

その部屋は、かたいベッドにロッキングチェアがひとつ、棚には先住者の眼を慰めたであろうミロのビーナスの石膏像が置かれていた。壁が悲しいくらい白い、小さな場所。

あとで雅文さんに、

「こんなにきれいなお部屋がどうして即座に見つかったのですか？」ときくと、

「大連の解放後の住宅対策についてよく知らないあなたにはまだ話したくありませんが、僕は今この町で住宅調整という仕事にかかわっているので、どの地区にどんな住居があるかを少し知っています。この部屋は、あなたのように美しい女性にふさわしいと思ったのです」

と、私の顔を見ながらぬけぬけと言うのだった。私が不眠不休の避難でそのままのやつれたみにくい姿をしているというのに。そして何かにつけて解放、解放というのは赤い旗のもとに集まっている人達の口癖（くちぐせ）である。

その日から雅文さんの影がそれとなく私にかぶさってくる、そんな秋の日々がはじまった。思い返すといろいろな事があった。ある時は元気になったら外に出て気晴らしをしよう、散歩に行こう、と言って雅文さんは私を波止場に連れて行った。雑然としたその波止場は、ソ連軍のために接収されて閉鎖してしまった大連埠頭の代替として貨物の出入りがひんぱんで、ジャンクの帆柱が林立し、船頭や商人の意味不明の叫喚が耳を刺す活気に満ちたマーケットだった。

雅文さんは私を顔見知りらしい漢方薬店の中に置いたまま、自分は魚や肉の匂いのする混雑のなかに入って行き、中国人たちと気軽に話しこんでいる。そのあいだ私は薬草の香が移ったビロードの椅子に腰をかけて、賑やかなその

マーケット風景を硝子戸越しに見ていた。

それにしてもあの方はどうしてこんな魂のぬけた、一文なしの、暗い人間をかくまってくれるのか。御自分の仕事もたくさんあるだろうに。若い女が困窮している有様に興味を持ったのだろうか。雅文さんは、

「この波止場に来る船は中国沿岸や朝鮮を回航してくるので本土の戦況や政情、人民の率直な声を聞くことができます。上層機関を通した情報は政治で曲げられてしまうが船頭の話は真実ですよ」

と、今の私にはかかわりのない事を言った。そしてこまごまとした日用品とか食料品を買いこみ、私の部屋に置いて行った。

また別の日は例の漆黒の自動車で四〇粁あまり離れた旅順市街にでかけた。雅文さんが運転し、私はうしろの席にすわっていた。世話になってはいけないという気持ちが、その人との距離を保つという行為に出る。

自動車は海岸沿いの道や、荒涼とした岩肌の谷間の道や、集落の農道を走った。私は車窓に顔を向けて、東京に帰る日までどのくらいかかるかわからないが一日も早く自分の力で生活を始めなくては、と考えていた。もう一度東公園町の会社へ行って社員の方に頼んで、父の同僚の家族の方々がこちらに来ていたらその方々にお願いして一緒に暮したい。でもそれも結局他人の恩を受けることで、雅文さんに助けられて日々をしのいでいる今と変わるところがない。考えていると私の小さな頭はすぐ破裂しそうになる。

旅順の町は新市街と旧市街に分かれている。新市街はすべての建物がロシア時代の欧風で、白亜の壁にポプラの葉影が映り、その美しさは暗い私の眼を見張らせた。

新市街の中央には堂々として人目をひく建築の博物館がある。蒙古、満洲で蒐集した考古学の研究資料のほか、新疆、敦煌地方から出た遺物のコレクションがあるとかで私たちは博物館に自動車を停めた。

雅文さんは考古学や美術品にも興味を持っていることがわかったが、この動乱のさなかに、支那の古い文化や陶磁が好きなどという人は今の場合私には遠い人のように思われる。それらの陳列品の前に立つと雅文さんは私の背後から肩越しに説明してくれるのだが、私には異国のそんな朽ちよごれた出土品のことなど今の切迫した気持のどこにもつながらない。

別の室では大きなガラス箱の中に体長三メートルという虎の剥製が入っている。アムール地方の虎は世界最大だと書いてある。琥珀色の硝子玉の眼が天窓を洩れる明りに孤独そうに光っていた。その天窓から午後の蒼空が見え、秋の雲が窓枠を横切って流れていた。虎の剥製などおぞましいだけで、

「毛皮だけとわかっていても、こわいなぁ」

としりごみすると、雅文さんは私の背に指先を触れながら、

「僕は以前興安嶺の山のなかで虎に出会ったことがある。寒い時期だった。その時やられた凍傷の痕が消えないが。バイコフのシベリア探検小説を地で行ったようだった。銃は持っていたが緊張しましたよ」

と言った。私が、

「関東軍の兵隊さんだったのですか？」

とたずねると、

「まあ、そんなところです」

と濁してしまったが、やはり軍隊にいた方にちがいない。大学は出ていそうだから尉官くらいか。このインテリジェンスのある人が馬賊をしていたわけでもないだろう。馬賊は父の嫌いなもののひとつだった。

「興安嶺なら私も行ったことがあります」

と私は言った。

「え？　あんな山の中に」

「ハロンアルシャンというところ」

「どうしてそんな奥地へ行ったのですか。美也子さんのような若い女性が」

「父が鉄道員ですから、鉄道の仕事のことで用事があって、わたしもついて行ったのです」

雅文さんは思い出したように、

「お父さんはあなたの話だとこちらへ避難する途中に亡くなられたのでしたね。しかしそれが九月以前のことなら東北の治安はそれほど悪化していなかったと思う。その時期すでに沿線に暴動が起っていたとは考えにくい。異常時だったので美也子さんの誤認ということもある。僕には何とも言えないが希望は捨てないことです。僕も出来る限り協力します」

などと気休めなことを言った。

再び自動車で大連方面に帰るとき、日露戦争の戦跡だという白玉山（はくぎょくさん）のふもとを走ったが、そこから旅順港が見えた。港内に集結したロシア軍艦を封鎖しようとして、広瀬少佐と杉野兵曹が港の出口を塞いだ勇敢な話がある。また旅順が日本軍の手に落ちた時、乃木将軍とロシアのステッセル将軍とが会見した水師営という村落がここから遠くない所にあるそうだ。私はそのことを雅文さんに言おうかと思ったが、めんどうくさくなり黙って座席にすわっていた。

雅文さんは言う。あなたが白い歯を見せてほほ笑むと僕もうれしくなる。あなたが僕に無関心であるのは知っているが、僕はあなたに助力するだけで充実している、と。大連到着の日からの私はよほど笑わぬ人間になったらしい。本当に愉快なことなど何ひとつありはしない。雅文さんが趣を凝らして私を慰め支えてくれることについては、もちろん感謝している。感謝を通りこして今の自分はあの人に

よって生かされていることを考えると、とても苦しい。雅文さんは私について興味があるらしく、頭痛がしてベッドに倒れている時に不意に来訪されると笑顔を作って迎えはするが、困惑する感情も出てしまう。私の容姿に合うような衣裳もないし、起き出したままで異性と対座しているなんて耐えられない。私の事を単に好奇の目で見ているとしたら、それは侮辱というものだ。やはり大陸などに来たのがいけなかった。女は未開の国に行くものではないと母が止めたけれどそれは本当だ。夜になり、この洋館に住む人々の足音が廊下から絶えてしまうと私は泣き出す。

しかし、と私は鏡の前で涙をきれいに拭き取る。待っている母のところへ、ふるさとの東京に帰るためには泣いてなんかいられない。人の話によると日本への帰還船はまだ出航しないが、私には親や保護者がいないのでその通報を聞き洩らす心配もあるし、一般の人々と同じ条件で船の順番待ちをしていたのでは飢え死にしてしまう。私は一人で戦っている。あらゆる機会をのがさず、智恵を使って生きるのだ。好奇の目で見られたとか、侮辱されたとか言って腹を立てていられるのは平和な時代の秩序ある社会の中だけである。頭の切り換えが必要だ。がまんしなくてはならない。

だが、あの人は私に何かもとめているものがあるのではないか。それでなくては無一物の避難民である私に与えつづけることはしないだろう。無償の愛として頂けるのは仏様のお慈悲か、ナイチンゲールくらいのものだ。それならそれでハッキリ私に要求すればよいのだ。私は答えるでしょう、私でよければ何でもあげる！　と。私の心はあの時列車の窓から見た満洲の野の、ぼうぼうとした草原のように荒れ果て、苛立った。

私は一人で会社に行った。大連に到着した日にヤマトホテルの前で空腹のために坐りこんだことを思い出して、記憶のある大広場の方に行った。路面電車は動いていたけれど系統がわからないし、血相を変えた男たちが停留所で何やら口論をしているのでおそろしくなり歩いて行った。保安隊は町の治安任務を担っているのに、私は彼等を信用していない。彼等が町を巡回してくると眼ざとい私は遠くから発見しすばやく逃げる。

会社では父の籍がある鉄道部の後輩でハルビン事務所の沖野さんという方がいて、父のことを心配してくれた。

このことは雅文さんからも話すことを要求されたが、ここでも私は父と別れたときの状況を話さなくてはならなかった。

ああ、あの日のことは早く忘れたい。――列車が四平街（だったと思うが）の駅近くでまた停まってしまい、外では銃声がしはじめた。パン、パンという音で多分小銃の発射音だろうと思った。車内の人々に不安が伝わった。沿線

に騒動が起る前に私を大連に運ぼうという計画で私と離れずにいた父だったが、集団にはしっかりした男性が少なくて人々に何かと頼られていたため責任を感じたのだろうか、ちょっと様子を見てくるからと知り合いの男性と二人で線路ぎわに降りたのだが、それが間違いのもと。もっと汚い身なりをしていて風采のあがらない男なら無視されて何事も起こらずに済んだと思うが、父の場合は押し出しがよく、売られたケンカならいつでも買うといった姿勢なので、見知らぬ横柄な日本人として暴徒の憎悪がかき立てられたのだ。

銃や棍棒を待った男四、五人が寄ってきて、私が身をのり出して見ている車窓の外後方で口論がはじまり、すぐに銃声がした。人の群れにかこまれた父が倒れたのが見えた。私は何か絶叫しながら車内の人や荷物をかき分けて列車から飛び出そうとしたけれど、何人もの女の方に必死に引き止められているうちに列車は動き出した。きたない手でこするので炎症をおこして痛む眼に、父の倒れた現場が遠ざかって行った。

あまりのことに私は意識を失ってしまい、目が醒めたとき周囲の人々はこの不幸な事件を気の毒がってくれはしたが、結局どうにもならなかった。

その日以来私は中国人を嫌うようになった。日本の私たちが中国に進出して事業を始めたのが侵略だったと言われたらそれまでだが、父は御国の方針にしたがって献身をしたのだ。父が従事した満鉄の仕事は個人の意志では是も非も言えないことだし、私的な生活では父は中国人の使用人や労働者をとても大切にし、友人として交際していた。その父がいま戦争だとは言いながら名もわからない小駅の、がらくた道具が放置されている荒れた線路ぎわで撃たれるとは。

沖野さんは、すぐに連絡をとり弥生町というところに住んでおられる同じ満鉄の矢嶋さんという家族を紹介してくれて、

「矢嶋さんの家は広いし、奥様もやさしい方だし、あなたと同じ年頃のお嬢さんもいますから安心して同居なさい」

と、その日のうちに私を矢嶋家に連れて行った。私はそこの奥様とお嬢さんにお会いして二人ともとてもやさしい方との印象をもち、同じ会社の社員の暮しですぐ溶けこめると思ったけれど、なぜか臥龍台の洋館を出て矢嶋家に移ることに気が乗らず、ふたたびあの白い部屋に戻った。

菜館にて

料理人が肉饅頭の蒸籠（セイロ）のふたを取ると、立ちのぼる湯気が書画で飾りたてた店内に充満し、鼻が触れそうに向き合った雅文さんの顔さえもうろうとかすむ。

私は雅文さんを前にして視線の置き場がなく、うしろの壁に張ってある支那美人の絵を見ていた。美人はどこかの楼閣を背景に大きな扇をもち、あでやかに笑っている。

雅文さんはじろじろと私を眺め、絶え間なく酒をのみ、おしゃべりをやめない。話の内容はとてもまじめだ。

「いま大連の人口は半年前の約二倍になっている。六〇万人くらいになっている。奥地から逃れて来た人がこの町に足止めされているのだ。僕が属している人民政府はまだ組織されたばかりだが、当面の課題は市内の住宅を調整してこれらの難民に住宅を供給することです。いや、それ以上に必要なことは日本の植民地政策によって郊外に追いやられていた現地住民に土地と家を戻すことです」

「それを雅文さんがやっているの？」

「僕はまだ若輩だし、実戦ばかりしていて政治の経験も浅いから毎日苦労をしているけれど、われわれの仲間は皆若い。そして時代は変わった。あなたのお父さんにはお気の毒ですが今度の戦争で日本が敗退したのは歴史的必然ですね。美也子さんも侵略者の一員として満洲に来たわけだが、大陸の人達がこのように弱乏しているのを見てどう思いましたか？」

「でも雅文さんだって同じ日本人じゃありませんか。わたしばかり責めて御自分はどうなの」

「僕は中国人だし、だから中国のために戦っているし、大局的にみて日本の侵略より国民党との戦いを重く見ています。なぜか？　他国を侵略する者は必ず敗れる。歴史上の事実ですね。国内の戦いのほうが手に負えない」

私はその時雅文さんが言った僕は中国人という言葉を聞きのがした。

「立派なのね。それじゃあなたは、わたしの父が撃たれたことを心の中では万歳と叫んでいるのでしょう」

「いや、決して。その事件については極力僕等の情報網で調べてみます。遼寧省には特に同志が大勢います。本当のことを調べて美也子さんの苦しみを和らげてあげたい気持でいっぱいだ」

「それはどうもありがとうございます。わたしは雅文さんにどう感謝していいかわかりません。でもお礼にするものが何もないわ」

私はお礼を言葉にするのが苦痛だ。

「僕が代償を求めていると思うのですか。とんでもない。僕はただ美也子さんを慰めてあげたいだけです。僕の仕事であり、責務なのです」

私のそばで料理人がまた蒸龍のふたをとったので肉の匂をふくんだ湯気がどっと立ちのぼり、私たちを包んだ。湯気ってどうしてこのように体を和ませるのだろう。それはきっと私が飢えているためだ。

「わたしはいつ引揚げの船に乗れるのでしょうか？」

私はそろそろと本音を出した。
「それは僕にはまだ答えられない。埠頭はソ連軍が押さえているし、帰還業務はソ連の指揮下にある。しかしいずれその業務も人民政府に移管されると思うから僕を信じて待っていてください」
雅文さんは一息ついて私をつくづくと見ていたが、
「美也子さんは眼じりが長く切れていて、僕たち東洋人にある目頭の蒙古ひだがめだたないので眼が大きくてとても美しいね」
と言った。この人は少し酔っているのではないか。しかし私は思わず赤くなる。
「わたしは日本人ですもの、蒙古には関係ありませんよ」
「そうではないんだよ、蒙古ひだというのはアジア人に多く見られる人種的特徴さ。日本人も当然その仲間です」
「よくわからない」
雅文さんは、
「ロシアが初めてこの町を築いた時、ダルニーという名をつけた。それは遠い所、という意味だ。彼等の本国から見れば大連は遥かに遠い大陸の南の果てだ。僕は以前からひそかに美也子さんにダルニーの瞳という愛称をつけている。それほどにあなたは美しい」
と言った。私は下を向く。この人は酔っていて自分で何を言っているのかわかっていないのだ。
「美也子さんは僕と会うたびに早く東京に帰りたいと訴えるけれども、いま黄海や東シナ海には連合軍が投下した機雷が多く浮遊していて、初期の引揚船はこれに触れて必ず沈められる。美也子さんが東シナ海の底に沈むなんて想像するだけでも悲しい。だからあまり急がないでほしい。あと二年もすれば掃海作業もすみ、安心して船に乗れるのだから」
えっ、あと二年もですって？　雅文さんはまた酒をつごうとする。私のほうから盃についであげた。
「中国が荒廃したのは日本のせいばかりではない。僕達共産党の真の敵は帝王政治のカラを背負って民衆の食と土地を奪う国民政府です。僕達は中華本土で五年来その敵と闘って、いたる処で人民と土地を解放しました。今は黒龍、吉林、遼寧が戦場となっている。美也子さん、あなた唐詩人の杜甫を知っていますか？　杜甫には『春望』という五言絶句がある。国破レテ山河在リ、城春ニシテ草木深シ、で始まる詩ですが、この詩句は戦乱のたびに破壊をくりかえす国土の歴史を象徴していると思う。だから今度の戦争を機に二度と破壊されない新中国の建設をしなければなりません」
私は気がついて言った。
「五言絶句というのはタテ五文字で四行、起・承・転・結となるのよ。杜甫の春望はタテ五文字、ヨコが八行ですから五言律詩です」
雅文さんはあっけにとられた表情で私を見た。相手が女の子だからと軽い気持ちで詩の話をしたのだろうが、漢詩の約束事は学校で補習したから知っている。
雅文さんはしばらく眼を見張っていたが、夢中になって肉饅頭を食べている私に、やがて、
「駅で初めて会ったときから僕は美也子さんが好きでした。僕は今長々と話したようにこういう仕事をしていますが、将来は市長になりたい。あなたのような聡明な女性が僕のことを助力してくれたらどれほど嬉しいだろう。決して不幸にはさせないからあなたも大連に留まりませんか」
と、息の音も止まるショックなことを言い出した。
私は食べることも忘れて、
「酔っている人とは本気の話はできないわ」
と叫んで立ち上がってしまった。
今日、私は返答に詰まるような事を雅文さんに求められそうな気がして、この菜館に誘われたことについて警戒していたが、その心配が現実になった。もしおことわりしたら私は秋の深まってゆく冷たい街頭に放り出されるだろう。
煉瓦塀の続いている暗い道で雅文さんと別れた。寒いからと雅文さんは私の着ているタルバガン毛のシューヴァーの襟を立ててくれた。夜の道になるから送ろうと言うのを、
「いいのよ、一人で大丈夫だから」と味気なくことわって、煉瓦塀の角を曲がり足を踏み出すと北風が激しく吹きつけて来た。
私はふり向かずうつむいて、落ち葉がころがって行く舗道を見ながら歩いた。
私は雅文さんに体をあげることを考えていたのだった。あの人は男だから私を単に外側から眺めたり、私の助言だけで満足することはない。男の気持はよくわからないがあの人はやはり私の体を求めているのだと思う。そう断定しながら自分はとんでもない見当ちがいをしている早とちりの、恥知らずの女ではないか、とひるむ。しかし私は鏡に映してみる顔や体を自分でもいいねと思って愛撫したくなるし、一方でこれを異性に触れさせずに終ることも少し淋しい。いずれ失われるものなら失うことに価値をもたせるべきだとも思う。そして私は雅文さんが平凡な男性ではないことを自分への言い訳として高い崖からとび降りる気になった。
しかし、無事東京に帰った時、そしてもっと生きられることがわかった時、喪失したものについて私は深く後悔しないだろうか。

花の歌

それで、くよくよしたすえに気持を決めたある日、その

日はしっかり記憶にとどめているが、十二月十日に雅文さんの住んでいるアパートメントハウスに行った。晴れた冬空の下に遠い風景が陽の光に輝いている、明るい午後だった。

南山という高台の住宅地にある雅文さんの住まいは道路から何十段ものきざはしを登り、頑丈な門扉をひらき、夏の間は薔薇や牡丹が咲き乱れるという庭を通り、亭(あずまや)と噴水のある池の道を歩いてやっと彼の部屋のドアに達するという贅沢なアパートだった。それは雅文さんの生活が裕福であるということだった。こんなことでは人民のために奉仕するという彼の看板と矛盾するのではないだろうか。

冬枯れになっていたが、それでも小奇麗に手入れされているその庭に佇(たたず)んだとき、私は雅文さんの裏を見てしまったように思って彼を理想的に買いすぎていたと思い、大変な決心をして出かけてきたことを後悔した。

でもここまで来てしまったのだからしかたがない。庭に立っていると、ちょうど雅文さんが友人の客を送って出て来たところだった。

部屋の中では自分でも哀れなくらい緊張して、雅文さんがストーヴに石炭を投込んだりロシアのウォッカだとか言ってグラスに注いだりするのをピリピリ張りつめた気持で眺めていた。トランプをして全然勝てず、古いオルガンの蓋をあけてハルビンの日曜学校のサハロフ神父に習ったピアノ曲、ランゲの旋律の美しい「花の歌」をたどたどしく弾いたりしているうちに夜になった。

これ以上何もする事がなくなったので私はすっかり観念して雅文さんに、

「今夜は泊まる」

と言って長椅子の端に腰かけ、彼がそばに来るまで動かず、かたくなっていた——。

それからどのくらいの時が過ぎたのか——。というのはあまりに物語風な表現で、実際には夜から朝になり、朝がおそくなり昼近くなったということ。亭のある庭に面した窓を覆うカーテンが明るくなって夜に馴れた眼が痛く、いまさらのように恥ずかしさが私を責めた。

おそくまで私は彼のベッドから出ることができなかった。毛布の下で私は裸になっていたからだ。衣服はどこかに隠されてしまった。私は夜を徹して重い雅文さんの体に押しつぶされ、のがれようとして呻きながらベッドの中でころげまわっていた。苦痛はあっても甘美なものは何もなかった。

午後から雅文さんは役所に出るとかで、そのころになってやっと私は自由になったのだ。

「それでは解放してあげる」

と彼は笑いながら言ったが、まさか人民の解放と私のことを混同しているわけではないだろう。

私は毛布の下から手を出して衣服をうけとり、

「服を着るから出て行って！」

と下着の一枚を彼に投げつけた。

洗面所に行ってブラシがわりに指で歯をこすると指に少し血がついた。明るいタイル張りの室内でそれは鮮かな赤だった。私ははっとして寝室に引き返し、ベッドのわきに立ってネクタイを結んでいる雅文さんを押し退けていろいろなものが乱れている枕元から赤い斑点のあるハンカチをとりあげ、きちんとたたんで洋服のポケットの中にいれた。するとにわかに悲しくなって私は泣きだした。

すると雅文さんは、

「あなたは後悔していないのにどうして泣くの？」

と言った。私は返事をしなかった。

昼の夢

私は栄養欠乏症の自分の足をはげましながらロシア人墓地の礼拝堂に近づいたが、尖塔の鐘はアジア大陸の秋の、静かにひろがる青空のなかに浮かんだまま動きだそうとはしなかった。

あれはこの教会の堂守が建物の中にいて、下から綱を引くから鳴るのだわ、と思いながら鐘楼の下まで行き、粗い煉瓦の壁を掌(てのひら)でたたいて催促したけれど、ふり仰ぐ錆(さび)色の鐘はひっそりとしていて高空を流れる白銀色の雲がその背後をさらさらと横切るばかりだった。

鐘撞き堂の下まで来てもあの鐘が鳴らなければ、自分で賭けて自分で賽を投げた通り雅文さんの所に行かなくてはならない。とは言っても、こうして気持を入れて女子供は昼間でも出歩けないという厳戒の町を危険を承知でやってきたのだから、たとえ鐘が鳴っても行かないわけにはいかない。

こんな具合で頭の中は支離滅裂。

私がハンカチーフをよごした日——あれは去年の十二月十日——から雅文さんは私に対してプラトニックではなくなった。それでなくては私の立つ瀬もないわけだけれど、それまで私を苦しめていた負い目が霧のように消えていくのを感じた。この頃では雅文さんの事を精神的に愛してはいないにもかかわらず体のほうでは彼のことを苦にしていないのだ。まあ、私はまた一体何を考えているのか。

私はアカシヤの細やかな枝葉越しに頭が痛くなるまで空を仰いでいたが、その時建物の扉が開いて僧服を着た西洋人の男が出て来て、とがめるようにこちらを見たので私は急いでそこを立ち去った。路面電車の走るメインストリートに出た時、うしろで鐘の鳴る音が聞こえてきた。

私は青雲台、桜花台と高台の道を歩き、春日町から右に折れる。鳥居を失い、荒れはてた大連神社の前で目礼して、

その次の神明町のほうへ行った。美しい並木の下を歩いても平和はなく、何時敵弾が飛んできてこの大切な体をつらぬくかわからないのだ。この町は無防備都市。

私が日本を出発した旅立ちの町神戸は六甲の山を背にしているが、大連はロシア人が岩山を切り崩して港を造り、海岸近くに平地をこしらえ、東洋のパリを建設しようとしてその夢が果せず壮図半ばで去ったために南山という山が市街の南に残り、欧風の住宅が山に迫っている景観は神戸の町を思わせる。

雅文さんの住むアパートメントハウスはその南山の麓にある。絵葉書で見た奉天の城壁のような塀が長々と続き、中に入るために設けてあるゆるやかな階段を登ってゆくと、唐草模様の門がある。潜り戸はいつも開いている。そこから身をすべり込ませるとさらにもうひとつの門があった。このアーチ形の屋根には薔薇の枝が絡んでいるが、さすがに手入れをする人がいないのか、荒れた感じになっている。でもその先にひろがる支那ふうの庭園は美しい。中央にある天に昇ろうと身をくねらせている竜の像の、かっと開いた口は噴水のノズルだろうが、水は出ていない。池のほとりには園遊のための亭(あずまや)があって、まわりに牡丹の草本が植えてある。いま花はないが初夏の花のさかりには観覧する人の姿もあった。私もそのなかの一人であったけれど。庭のまわりに部屋が建てられ、その壁はまるで寺院のように赤や青の原色で、それが陽の光に照り映えている。

私は第二の門を押しあけ、綺麗につけられた小径を池のふちに沿って亭のところまで行った。そこで何となく躊躇して、まっすぐ雅文さんの部屋の扉まで行かずに亭の中に入って梧桐(あおぎり)の大きな葉が散っている石のベンチに腰をかける。もう夏ではない、ひやりとする石の感じ。おしりに押されて乾いた音をたてる落葉。

私は午後の陽が反射してキラキラと何千もの小旗をうち振るようにさざ波がきらめく池の水面を眺めていた。時折黄褐色の翅をしたアゲハ蝶が来て、建物の壁や屋根にからむように活発に飛んでいるほかは動くものはない。

右側の部屋から雅文さんが出てきた。私は気づかぬふりをした。彼は、

「今日は迎えにゆこうと思っていたのに手が離せない事情が出来てしまったのです。町の治安がよくないから僕がゆくまで家にいたほうが安全だと思うが」

と、遠くから話しかけてきた。私はちょっと笑っただけで黙っていた。

雅文さんは額に手をかざし光線をよけながら、

「美也子さんがそこにいると庭が長安の華清池に見えてくる。そして他の女性が色あせてしまう。六宮の粉黛顔色ナシ、か——」

と言ってこちらを見た。暗い室内で革命の研究でもしていたのか、明るい外に出たので眼がくらんでいるのだ。けれど私は膝小僧を合わせて坐り直す。

「また変なことを言って。わたしにわからないと思って、漢文ばかり話すのね」

私は叫ぶ。雅文さんは、

「一朝選バレテ君王ノ側ニアリ、眸を回ラシテ一笑スレバ百媚生ズ、六宮ノ粉黛顔色ナシ、と言ったのだよ。白居易の長恨歌にあるでしょう。楊貴妃の比類ない美貌を歌った、あれさ」

と、こちらにやってきた。

「そんなことがこの御近所に聞えたらどうしますか。女性に対して失礼ですよ」

私はたしなめてあげたが、雅文さんは間近かになり、見上げる大きさになったので、人目もあるし、こんな見通しのよい亭のなかで押し倒されてはたまらないと思い、あわてて起ちあがった。男の馬鹿力にはいつも思い知らされている。

「何をびくびくしているの？　怖がる癖が抜けないね。きのう、金州に住んでいる友人があそこの果樹園で採れた林檎を持ってきてくれましたよ。なかに入って二人で噛ろう。金州の林檎は有名だよ。日本流で言うと国光に紅玉」

雅文さんは傍に来て言った。

「そのお友達も中国人なのね」

私は漠然とした不安に襲われる。この人のお友達は中国人か満洲人。いや朝鮮の方もいるだろう。私はなじめない。

二人は屋内に入った。中は客庁(きゃくま)と居室と寝室。居室には円いテーブルがあって、その上に本が何冊も積んである。私は何度もこの部屋に入り、この円卓に頬杖をついた。けれど頬杖をついている時間は多くの場合長くはなかった。私は寝室の方に連れて行かれるからだ。

雅文さんの部屋の様子を知りつくしたので、着ているものが隠されることはあっても私はすぐ見つけてしまう。だからその悪い遊戯は中止になったが、寝室ではやはり脱がされてしまう。それは嫌だから彼の自由にさせまいとして抵抗すると相手は私の声も耳に入れず突きとばしたり、床に投げつけたりの乱暴を始める。だから私の体には打撲や擦り傷がいつもどこかにある。

こんな修羅場を父や母が見たらどんなに恥かしく思い歎かれることか。

二人で紅茶と林檎のデザートにしようと、私は戸棚からティーカップ二つと果物皿、ナイフを出してテーブルに置いた。厨(くりや)へお湯を取りに行った雅文さんが戻り、卓上にあった本を片付けた。

彼の説明によるとこれらの原書は、ツルゲーネフの「処女地」、ショーロホフの「静かなドン河」、ハイネの詩集、中国の新しき指導者毛沢東の「実践論」「矛盾論」などだ

そうだ。そして彼は、

「将来あなたが僕のそばでこれを読んでくれたらとてもうれしい」

と言う。わがまま勝手な人。

少女時代から私の読んだ本は、といえば少女倶楽部、童話雑誌の「赤い鳥」、吉屋信子や北川千代の少女小説、「赤い鳥」の中の西条八十とか北原白秋の歌を愛唱したが、外国の小説など読んだことはなかった。いや、ヨハンナ・シュピーリの「アルプスの少女ハイジ」は読んだ。こんな幼稚な頭だから行く先彼が失望するのは目に見えている。

本の下に新聞の綴じ込みがあった。昨年ハルビンを去って以来新聞というものを見たこともなかったのでドキリとしながら紙面をのぞきこんだが、それはかつて私も読んだ敗戦当日の新聞だった。昭和二十年八月十六日付。大連日日新聞の臨時夕刊。多分雅文さんが書きこんだらしいメモやアンダーラインですっかりごちゃごちゃになった紙面からふたたびこんな記事を読んだ。

〈東京発。大東亜戦争終結の聖断下るの日、十五日鈴木首相は事ここに至るについての内閣告諭を発した。右告諭において鈴木首相は、戦勢われに利あらざる時、未曾有の破壊力を有する新型爆弾を敵が使用するに至って戦争の仕法を一変せしめると共に、去る九日のソ連邦の対日宣戦布告は帝国をして未曾有の難局に縫着せしめ、今日の事態に至った実情を素直に述べた……〉

私は紙面から顔をそむけて、

「これよりあとの新聞はないの？　わたし大連に来てから全然見ていない。いま東京がどうなっているかわからないのですもの」

と言った。雅文さんは、

「美也子さんが読めなかったのは無理もない、ここではいま新聞は発行されていません。だからこの情況下では流言非語が流れやすい」

と言う。

「そうね、日本では広島に新型爆弾が落ちてからというもの地震や津波が起っていて、もう日本はないも同然だと、ご近所の方から聞かされました」

「それがデマゴギーというやつかな」

「新型爆弾って、どんな爆弾なの？」

「ウラニウムやプルトニウムなどの核分裂で生ずるエネルギーを利用した爆弾、としか僕にもわからない」

「東京はどうなっているでしょうか。去年のお母様の手紙だと三月に下町が焼けてそれから山ノ手も焼けたそうよ。わたしの家がある碑文谷はどうなったのかなぁ……」

私は望郷の思いで涙ぐむ。

父のことは決してあきらめてはいけないという雅文さんの親切を受け入れて、近頃では父は出張中でいまは御不在

と自分に言いきかせているが、考えてみると当然生きてはいられない状況だったので、たとえ雅文さんに引き止められてもこんな所で待っているわけにはゆかず、一刻も早く帰京してわが家の前に立ちたいと思う。もしわが家が焼けて雑草の繁る空地となっていたら、お母様さえ御無事なら、お父様がいつまでも御不在でも私が鳥井家の新しい家を建ててみせる。

「うわさで知ったけれど、漁船にお金を出せば日本まで乗せて行ってくれるんですって。女でもかまわないそうよ」

私はよけいなこと言ってしまった。思った通り雅文さんは不愉快な顔をした。

「僕にその漁船を紹介しろというのではないだろうね。そんなに危険を冒したいのか。時機が来るまで待てと言っているのがわからないとは困った人だ」

「すみません」

「密航なんて国際法違反で犯罪だよ。そんなことできる筈がない。正式な手続で帰国すべきなのだ」

「すみません。もうこの話はやめる。別のことを話しましょう。たとえば自分の故郷のこと」

「少しも別の話になどなっていない。結局帰りたいという事じゃないの」

「わたしの故郷は東京、山ノ手。雅文さんのふるさとはどこですか？」

「郷里は上海。僕は中国人だから。姓は劉というのです。以前から言っている通りだ」

「えっ!?」

あなたが中国人？　やはりそうなのか。だから思いあたることがある。少し前にあの菜館で雅文さんが私とお酒を飲みながら僕は中国人ですと言った気がした。酔っていたせいで聞き漏らしていたのかもしれない。それでなくても私はうすうす気が付いていたのに、確認することを引き延ばしていたのだ。そしていま本人から再度告げられると今までのことが急に色褪せた。私は闇の中に落ちて行くような気がした。

私は思わず立ち上がった。膝がテーブルを突きあげて、それが傾き、乗っていた林檎や小皿やナイフがひどい音をたてて床に落ちた。膝の痛みも忘れて庭の方へ向かおうとしたけれど、私は片腕をつかまれて二歩とは遠ざかることができなかった。いつもなら雅文さんの馬鹿力に降服するのだが、この時ばかりはよそよそしい異国人に見え、嫌なやつ、と嫌悪して引き戻されまいと足を踏ん張った。そのとき意地悪く彼が手を離したので、私は勢いあまってのめり、頭から床に倒れこんでしまった。キャッ、とかなんとか悲鳴をあげたと思う。

雅文さんはこちらが起きあがる時間を与えず馬乗りになって、私の顎（あご）と後頭部をつかんで頸をゆすぶりながら、

「君はいま僕を敵国人だと思っている。そして侮辱したといってもいい。そんな君の思いあがりが読めないと思っているのか」

と言った。雅文さんは私の表情を素早く読んだのだ。

私は猛獣の前の小兎のように身が疎んだが、自由だった右手で床に落ちていた果物ナイフをつかむと下から、

「乱暴すると私もやるわ！」

と切りつけた。しかしそれは空を切っただけ。私は左利きで右は他人の手のようで正確に動かないし、近づいた雅文さんの顔が意外に憂愁にみちていたので、本気でナイフをふりまわす気迫も鈍ってしまったのだった。

雅文さんはナイフをにぎりしめて離さない私の指を一本ずつ開かせながら、

「これはいけない、刃の部分を握ったので小指が切れてしまった。手当が必要だ」

と、ナイフをテーブル上に置き、きびしい声で

「君はいま僕のプライドを傷つけた。だからそれ相当の償いをしてもらう」

と、私を抱きあげようとする。今日は膝の打撲と指の切り傷だけでは済みそうもない。

「放して！」

と私は暴れ、雅文さんの腕をかいくぐり、椅子の脚につかまったり、幼女のように床にしがみついたり、はね起きて客間の方に逃げたりしたが、窓に垂れている綺麗なうすぎぬのカーテンを引きちぎろうとまでは思わなかった。あらがいの限度を心得ていたのだ。いつもの通りの、これは遊戯で茶番だ。

私は客庁（きゃくま）の窓際にのがれて息をはずませながら相手を睨みつけていたがここでもみ合うと窓硝子の壊れる危険があったので、手をつき出して近寄るな、という合図をした。頑固な抵抗で興ざめがしたのか、雅文さんは椅子に腰をおろして私の方に来ようとはしなくなった。

窓の外では陽が傾いて池畔の亭（あずまや）の影が水に揺れていて、水面は青い空も映している。

私は長い間そこに立って、向こうの建物の屋根に陽が隠れて庭が冷たい色で占められてゆく様子を眺めていた。私はこの時もまた彼が劉雅文という中国人であることについて考えていた。雅文さんの使う日本語があまりにじょうずなので、人民政府に日本人が参加できない常識に気づかなかったし、市長になりたいという雅文さんを不自然だとは思わなかったのだ。いままで私が漠然と抱いていた雅文さんへの不快感は、外国人が他の国の事情に割り込んで正義を語るいやらしさだったのだけれど、彼がその国の人だというのならそれは本物の愛国心として応援してあげる。わがままで厚かましいところがあり、乱暴もするけれど知性があって優しく、堂々としていて友人に信望があり、私を

賞めることを忘れない雅文さんを決して嫌いではない。

そこまで考えたら急に気分がすっきりとしてきた。

やがて背後で気配がするので何ごとかとふりかえると、雅文さんが部屋の隅や椅子の下に飛び散っていた私のスリッパを拾っているのだった。そして、

「そんなところに立っていないで、こっちに来ないか。さっきの指の消毒をしよう」

と言葉をかけてきた。沈黙のあとで内心恐ろしくも淋しくも思っていたので私は素直に長椅子のほうに行った。

私が座り、雅文さんが座った。長椅子は古ぼけていてクッションが柔かすぎるので体が沈んでしまい、何度座り直しても顔は天井を向いてしまう。だが涙をこぼさないためにはそんな形の方がよかった。

「美也子さんはまだ少女的で、それだけに愛らしくも思うがいつまでも甘やかしておけない気もする。あなたはやはり多くの日本人と同じで大陸の人々を差別している。子供の時から八紘一宇などと、帝国主義の教育を受けたので無理もないが。これからは考えを改めてもらいたいものだ」

そう雅文さんが言う。気が弛んだためか指の傷がヒリヒリとし、膝のお皿も痛みはじめた。

「すぎたことはもうしかたがないわ」

私はトンチンカンな返事をした。今までの事を思いだした結論として自分に言い聞かせたのだ。

「そうか、それではちょっと指を見せたまえ」

傷は小指のつけ根で横に一センチはど。血はにじむ程度。雅文さんはオキシドールを綿に滲ませて傷を拭き、包帯がなかったので布切れで縛った。

「あなたと一緒にいるといつも救急箱が必要になる。まだ足のほうがあるだろう」

私が手で押さえようとするのをかまわずスカートをめくって、太くて長い二本の足をむき出しにした。私はたまらずに眼を閉じてしまった。

雅文さんの顔が間近にくると、私はいつも眼を閉じてしまうのだが、彼は眼を開けていてほしいという。あの時私の瞳孔が大きくなるのがわかるのだという。また、あなたは眼を開いていても僕を見ているわけではない、あなたはその美しい眼で何を見ているのかと言われる。いいえ、私は雅文さんを見ています、その意志的な濃い眉や誠実そうな眼やひきしまったお顔などを。けれど時々何も見えなくなることもある。

あなたは今、何をしているの。傷の手当に託（かこつ）けて私の足をあらわにしているわけね。私はいま長椅子のうえに仰向けに倒されていて無防備なので絞め殺すにはよいチャンス。人の命が簡単に奪われ、それが日常になっている毎日の中にいると、私にも自分が殺される理由があると思いこんでしまう。こんな小娘のために民族の誇りを傷つけられたと

感じたあなたの痛みは私の膝のケガなどとは比べものにならない。

しかし今の私には死は決しておそろしいとは思えない。あなたによってこんなに気分が昇りはじめると、死はその山頂に輝く雲の峰のようなもの。

私の髪がなにかに絡んでいる。古いソファだから革の下から釘のようなものが突き出ているのだ。痛いから髪をしらべて。

それから、頭を椅子の凭れから外したい。そう、それでいいわ。

暗くなってきたが、お庭にまだ陽は射しているだろうか？

石を投げる

大連ステーションの駅舎は東京の上野駅に似ている。

常盤橋交叉点にある天満屋ホテル一階の洋菓子店の中からショウウインドーごしに見る大連駅は上野駅そのままだ。私は懐かしさにうたれて、一緒に出かけてきた矢嶋亜矢子さんに、

「この駅は上野駅そっくりだと思いませんか？」

と問いかけてから、ああそうか、この方は満洲育ちなので東京のことは御存知ないのだと気がついた。

しかし亜矢子さんは、

「ええ、大連駅は上野をまねて造ったものだと母から聞きました。私は日本には修学旅行で京都に一回行ったきりですが」

と答えた。

私は亜矢子さんがその洋菓子店「東亜」でシュークリームの買物をしているあいだ、その店のフロアから人や車馬の往来が賑やかな交叉点の向うに聳えるベージュ色の建物を眺めていた。

店内は甘いクリームの香りとパンの匂いに充ちているのに、外は十一月の冷たい風が吹いている。晴れた空に黄色く点々と散らばってチカチカと光っているもの、あれは散り急いでいる街路樹の葉である。ここは半島に建設された都会なので海からの風が吹き、四季を通して毎秒5メートルの風だそうだ。

私は初めて見るかのようにこの駅を眺めているが、去年の八月下旬にあのプラットホームに降り立ち、みじめな姿で降車口から吐き出されたことを忘れない。あの日の駅前広場は北満から逃避行をしてきた人々の黒い群れが埋めていたが、今日は到着する列車もないらしく、降車口から出てくる人影は全くない。二階の乗車口から入って行く人も皆無である。それは当然のこと、この大陸で日本が繁栄をほしいままにしていたころの大連駅は満蒙の表玄関として偉容を誇り、こころみに日本から海路で大連港に上陸すると列車の連絡は満洲奥地や蒙古はもちろんユーラシヤ大陸をつらぬいて遠くヨーロッパに通じているということであったのに、今となっては夢破れて逃げ戻ってくる人ばかりだ。それも私のように生きてここまで帰ってくる人は幸せ、と言わなくてはならない。そんな有様だからこの駅の左右に翼を拡げた形の、欧州風の装飾がなされた外燈の並ぶプロムナードをゆるゆる登って改札口に到る、そんな構造に従ってこの駅から出発して行く人など一人として存在するはずがない。

私は最近、矢嶋亜矢子さんという若い女性と友達になった。亜矢子さんはいつか私が東公園町の会社に泣きこんだ時、お世話になるようにと紹介された同じ満鉄で中堅クラスの家庭のお嬢さんで、出征したきりお帰りにならない御主人の留守をまもっていられるお母様と、小学生の弟さんの三人で暮している方である。弥生町のエキゾチックな住宅地区にマックスという名の大きなシェパード犬を飼って、ゆったりした生活を送って居られたようだが、町を新中国政府が治めるようになってからは雅文さん達がやっている住宅調整とかいう政策のために近々その自邸を明け渡さなくてはならない事態に直面しているのだそうである。さぞかし雅文さん達政府の人を恨めしく思っていることだろう。だから私はたとえ口が裂けても自分と雅文さんのことは彼女に漏らすまいと決心した。

今日私が着ている紺のサージのスーツは先年阪神方面に嫁がれた長女の絹子さんの洋服で、私が秋を過ぎても夏物でがまんしているのを見かねて彼女のお母様がくださったものである。姉の絹子さんはこの服のサイズから想像して中肉中背の方だったのでしょう、大きな女の私にぴったりというわけにはゆかない。妹の亜矢子さんはどちらかといえば背も高く豊満な女性で、性格も陽気である。私が矢嶋さんの家でそのスーツを試着して姿見に映していると、亜矢子さんはそばから、

「美也子さんのスタイルは素敵。それにおとなの感じで、同じものを着ても姉が着た感じとまたちがう。私なんか全然だめ。子供ですわ。ブルーはいいわね。清楚な色ね」

と言ってくれる。スーツは清楚でも中身のこの身体はもう腐っている。

私のメランコリーは払いきれない。亜矢子さんの笑顔を見たりお母様の話を聞いたりしていると楽しい時間を過ごせるが、一人でいる時は絶望的になっている。しかしつらいのは私ばかりではなく、矢嶋さんの家庭も御主人の不在と生活の激変でひどい打撃を受けている。お母様の話によると終戦と同時に銀行預金が封鎖されたので、露天市場で家財を売りながら暮しているのだ。先日は雛人形を売ってしまわれた。長い間二人のお嬢様に愛された人形達であっ

たのに。でもとても心の優しい女の子を持つ中国人の夫婦に買われて行ったのでお母様は気持が救われたとのこと。その中国人の女の子はこのお雛様をいつまでも大切にしますと日本語で約束したそうである。お母様はまた夫はシベリヤに捕虜として連行されたのだろうが生きて帰ってくる希望もないので夜はいつも泣いています、と言われた。そんな悲しい話に加えて私にとっても衝撃的な事件があった。

それはある日、会社の沖野さんの紹介で会社の厚生施設の残務整理を手伝いに行った帰り道、中央公園の散歩道をソビエト軍将校の男性と手を組んで歩いている亜矢子さんを見てしまったことだ。

私は自分の眼を疑い、呆然として黄昏（たそがれ）の道を歩み去る二人を見送った。そのソ連軍将校はスラブ系の顔立ちにスターリン髭を生やし、いかめしく着こんだ軍服のぶ厚い胸にズラリと勲章を懸けていた。そんな大きな男のロシア人に手を取られては、豊満な亜矢子さんも可憐な少女のようにしか見えなかった。

植民地育ちといっても日本の女性であり、中流の家庭であり、厳格で愛情のある両親に躾けられ、教養も品位もある令嬢がどうして北の果てから侵入してきた殺戮のにおいのする気心の知れぬ紅毛のソ連兵士を好きになったのか。

亜矢子さんは一見して情熱的な眼鼻立ちをして、気性も明るく物怖じしない人だから、こういう生計の立てかたをするのにそれほどの決断や努力を要しないのかもしれない。でも「なぜこうまでしなければならないの？」という疑問と美しい亜矢子さんを惜しむくやしさが彼女に会うごとに湧いてくる。しかしこの私が、恥ずかしいことだからやめて、と彼女に言えるだろうか。私とても同じことをしている。だから私は彼女のしていることや自分の不始末について口をとざす。

今、政府からは何も知らされず、情報は風聞によって知るしかないが、奥地からの避難者は連日駅に到着しているとの噂なので、私は父が撃たれたのははたして現実だったのか、あれは正常でなかった自分の幻覚であってもらいたいと繰り返し考え、もし父が生きて大連駅に着いたら保安隊を通して役所の雅文さんに連絡されることになっているのだが、あの人まかせでもいけない気がするし、気持も落ちつかず、今日は町の地理を知っている亜矢子さんを誘って駅のようすを偵察に来たわけなのだ。

7番のナンバープレートをつけた市内電車を常盤橋の停留所で降りると、そこは百貨店やホテルの高楼が押し並ぶ繁華街。

いつも品切れで閉店している洋菓子店でめずらしくシュークリームを売り出していたので亜矢子さんの足はたちまち引き寄せられ、母へのプレゼントにどうしても買うのだと言ってその店に入ったのだった。

やがて店を出た二人は駅の周辺に警戒の眼を配りながら降車口の広場の方へ歩いて行った。広場には避難者用の仮小屋やテントらしいものが建っていて、その破片やら塵芥が散乱し、駅は遠目で見たほどきれいではなかった。

「昔は美しい町でしたが、終戦からこっちすっかり荒れてしまいました。品物が不足して商店もあらかた閉じているし。この町ももう終わりですわ」

と亜矢子さんは言う。

降車口のアーケードの下に十四、五歳の少年が七八人、手に棒切れを持って集まっていた。十歳くらいの小さな子もまじっている。

もちろん彼等は日本人ではなく、私には中国人、満洲人の区別がつかないが、とにかく大陸の少年たちで、どれもまだ物事の分別のつかない生意気ざかり。少年達は去年の夏までの被支配側の苦しい生活から自由となって町の主人公になった。昨日までの敗者が今日は支配者となって意気揚々としている。日本人の女や子供と見れば今までの鬱屈を晴らすためいじめにかかる。以前私達がやった仕打が投げ返されるとすればそれも受けなければならないだろう。

少年達は女二人が臆病そうにやってくるのを待ちかまえていたにちがいないが、私がうかつにも彼等の方を見て多くの目と視線を合わせたことで相手はこちらへの関心をあらわにした。

私は学校時代から眼玉が大きいと学友に言われていたし、雅文さんなどは楊貴妃の流し眼とお世辞を言ってくれたが、こんな場合は長所も災いになる。私はしまったと思ってあわてて眼を伏せたがもう遅い。

体の大きい、大将格の少年が好戦的に身をのり出した。

「行きましょう、急いで。引返すのよ！」

私のかげに隠れるようにしていた亜矢子さんが私の袖口を強く引っぱった。

「え！　そうね」

胸が激しく鳴っている。恐怖が私達をつかんだ。

ふりかえると駅前広場は人影もないが、あそこを横ぎって市電の通る交叉点まで走れば日本人も通行しているし助けてくれる人もいる。自分は栄養失調でも脚力に自信はあるが亜矢子さんは大丈夫か。

しかし敵に後ろを見せて一目散に逃げるのは私の自尊心が許さなかった。少年達との距離は充分ある。

私は、頬を青くして表情をこわばらせた亜矢子さんの手を引いて、

「あわてなくてもいいのよ、あんな小僧たちにやられてたまるものですか」

と急ぎ足で広場を横切った。来た時よりも広場が大きく感じられた。学校の運動会のとき、みんなの面倒をよくみてくれよと先生に頼まれたことを思い出していた。その時

なぜか私よりひとつ年下の亜矢子さんの面倒を見てあげなくては、と心に決めたのだった。

少年達は広場の真中まで追ってきて、そこで立ち止まり、ある者はお前等のことなど相手にしないのだというような意味の嘲罵の声をこちらに浴せかけ、ある者はゴム銃で執拗に石つぶてを放ってくる。小石は私の足もとまで飛んできた。

「くやしいね。小僧たちに邪魔されて駅の中に入れない」

私は黄色い顔をそろえている少年達を遠くからにらみつけた。

「しかたがないわ。町に出ればこんな目に遭うのはめずらしくないもの。男の人でも一人歩きは危険です」

と言った亜矢子さんの頬にはすでに血の色が戻っている。くやしい、という表情ではない。深刻に思いつめる人ではないのだ。

私はころがってきた小石を拾ってモーションをつけて投げ返した。

「ばかやろう」と叫びながら。

ハルビンにいた頃、夏に社宅の人達とスンガリーに泳ぎに出かけたものだが、水に飽きて背中を干したあと、私とか同年令の娘や男の子が岸から流れに向かって一斉に石の投げくらべをしたことがあった。私は投擲もうまくてだれよりも遠くの川面に飛ばした。仲のよかった十五歳のヒロシさんの石よりも遠くに飛んだ。

いま私の投げた石は低い山型を描いてするどく飛び、少年達の頭すれすれにその背後に落ちた。彼等が意外だ、よくやるな、という顔で感嘆の声をあげるのを聞き流して二人は空しく駅から退散した。

「私の父はシベリアのイルクーツクに抑留されているらしいの。会社の同僚の方が証言してくれました。将校だから苦役に廻されることはないでしょうけど、当分は帰ってこられません。駅に行ってもムダですわ」

亜矢子さんは怒っているのではないが、手ひどい目に遭ったのを恨んだのか、眼を見張って訴える。

「ごめんなさい、わたしの都合で無理に連れ出したりして」

私は物事に屈託しない亜矢子さんの性格を知っているので深くは謝らなかった。

「このまま帰ってしまうのもつまらないから、その辺を歩きましょうか。ああそうだ、山県通りの裏道に行きつけている茶館があるからそこに行ってみましょうか。コーヒーがあるかもしれません」

亜矢子さんはもう気分を変えている。

「案内してくださる?」

私も弾んだ気持になってたずねた。

「しますとも」

私は自分の足をどちらに向けたらよいのか迷うばかりなのに、彼女は大陸娘で大連育ちなので勝手知った道をもうすたすた歩きだした。

そう、この町は彼女にとって故郷なのだ。日本人なのに日本の風土とは縁がなく、アカシヤの枝のざわめきを揺籠(ゆりかご)の歌とし、馬車を引く満洲馬の蹄の音やサンザシの実を売る満洲人の呼声を聞きながら少女となった亜矢子さんの心の底は私などには想像できない思いがあるにちがいない。この先彼女も日本へ引揚げることになると思うが、私にとって日本は帰ってゆくところでも、彼女にとっては行く所、訪ねてゆく国でしかない。だから戦争によってこの町が荒れ果てても、戦勝国のソ連人に身を売ってでも彼女はこの都会に住むことを願っているのではないだろうか。

亜矢子さんは肢体が美しく現代的な顔立ちをしているから、まっすぐ前方を見つめてポプラの落葉がさらさら流れる舗道を歩くすがたはこの欧風の町にとけこみ、一枚の絵になっている。

その彼女が向かう前方の、街の空に浮かぶひとひらの雲が白かった。

マーシャ

ドアを引いて中にすべりこむと、店の奥では暖炉の火が赤く燃えていた。

「まあ、あたたかい」

と声を出して思わず気のゆるんだ私は、形も見せずにうずくまっている椅子につまずいてテーブルの角に横腹を突きあげられ、痛い、と叫んで床にしゃがみこんでしまった。

室内は海底のように暗く、暖炉の焚き口の炎だけが照明となってフロアに散乱している卓や椅子の影が背後の壁で踊っている。

亜矢子さんが大きな蓄音機のそばのソファに腰をおろしたので、私も痛むおなかをさすりさすりそれに従って坐った。

「どこの茶館も品切れで店を閉めているけれど、このお店はいつも営業しているのよ。ふしぎね」

亜矢子さんが言う。

「どうしてかしら?」

「知らないわ。きっと秘密のルートがあるにちがいないわ。美也子さんはコーヒーになさる?」

「コーヒーなんて一年以上も飲んでいない。本当にこのお店で飲めるのかなあ」

私はキタイスカヤの茶館と父の面影を心に浮べて目の底を熱くした。

しかし私は身近に人の気配を感じて顔をあげた。だれか、そばに来ている。重みのある人影が音もたてずに私にかぶさるように立っている。思わず声を出して頭をかかえるな

さけない防御の癖が出てしまったが、何かの花の香りに似た柔らかな気配で、その人が女性であることにすぐ気付いた。

「そんなに怖がらなくても大丈夫。このひとはマーシャよ。このお店の娘さん。この子のパパがマスターなのよ。私とは昔からのお友達」

と、亜矢子さんが紹介した。

なるほど、マーシャと呼ばれたようにこの人はロシア人だ。私が腰かけていて下から見上げているためだろう、足がすっきり長く腰の高い素敵な体形の人だ。

マーシャはかわいい笑みを如才なく私に向けたが、片眼をとじて亜矢子さんに合図を送り、

「ドラスチェ」

と言った。亜矢子さんも、

「ドラスチェ」と答えた。マーシャは今度は流暢な日本語で、

「コーヒーは今日は売切れ。もうないわ」

と言った。私達のオーダーを承わりに来たのだろう。

弱い灯火に照らし出された顔は、ねむたげではあるが切れ長の眼、すっきりと高い鼻、ドロップでも含んでいるようなふくらんだ唇。暗いためさだかではないが、瞳は黒く髪は濃い栗色。一概に欧州人といってもいろいろな型があって、きめつければ南欧の情熱的な容貌と北欧の沈みがちで知的な顔立ちに分かれると思うが、この人は多分白系のロシア人だろうから北の方の上品で静かな雰囲気をもっている。そしてこの人のこの人らしいところは胸がとてもゆたかなこと。

「いやだわ、せっかく美也子さんを連れてきたのに。美也子さんは一年以上もコーヒーを飲んでいないのよ。気の毒だと思わない？　だから紅茶にして、とでもいうの？」

亜矢子さんはくつろいだ態度になっている。やはりコーヒーはないのか。

「紅茶はあるし、ホットケーキなら出来ます。それにミルクをつけましょうか」

マーシャが白い手をエプロンで拭きながら言う。

「いいわ、それで。ないものは仕方がないわ。美也子さんもそれでいいですか。ちょうどおなかも空いてきたことだし」

私はいつも腹ぺこだ。

マーシャは厨房の扉の向こうに消えた。半開きの厨房から男の太い声とマーシャの交わすロシア語が聞こえていたが、彼女はまた現れて裳裾の長いスカートの歩みを運んで蓄音機のそばに寄った。くねくねと曲がったパイプの、あやしく光るピックアップを上げて針を替え、どれでもよいという感じでレコード盤をとり出してそれをかけた。

重厚な管弦楽の響きがフロアに流れ始めた。

「何の曲かしら、ね」

私は亜矢子さんにたずねた。

「さあ、わからないわ。レコード係にたずねてみましょうよ。マーシャ、こっちにいらっしゃい」

マーシャはおっとりと歩いてくる。

「ホットケーキなら今マスターが焼いています」

「そんな事聞いてるんじゃありません。いまあなたがかけたレコードの題名が聞きたいのよ」

マーシャは亜矢子さんの耳もとの髪をちょっと撫でつけるそぶりをして、

「うん、あれですか。あれはケテルビーの『支那寺院の庭』」

と答えた。

それは支那寺院の印象を現わした曲想で、寺院や庭園の静寂の中にもどこかしらに潜んでいる喧噪が、英国人であるケテルビーの異国趣味をかきたてたのだろう。そういう外国の訪問者がよろこびそうな通俗の音楽だった。

音楽はすぐに鳴り止む。針は盤に刻まれたみぞに沿って進み、中心のラベルの所まで行ってこすれ始める。自動的には停止しない。マーシャは上を仰ぎ両手を開いて、またか、といった素振りをしてレコードを取替えに行く。私達にサービスをしているのだろう。戻ってくると壁に凭れてゆったりと立っている。

「次の曲は何？」

私はマーシャにたずねた。

「アンダンテ・カンタービレ。チャイコフスキーよ」

「ああ、これは知っている」

そう、この曲はマーシャの両親にとって大切な曲ではないだろうか。革命はどのような事情のもとに行なわれたのか私はわからないが、遠く祖国を去り、広いユーラシヤを漂泊してついに極東のこの都会までやってきた人達の望郷の想いは、立場はちがっても私にはよくわかる。チャイコフスキーには共産主義の匂いはしない。

アンダンテだからゆったりした速さの、ロシアの民謡風の曲想で、ロシア人ならば故国の田舎の暮しを回想するだろうし、私が聴けば仕事も旅行も好きだった父に従って出かけたハイラルやマンチュリーの風景が甦る。皮革と羊毛の市の立つ日にはどこからともなく人が集まり、市が終るとひっそりとなる草原の町ハイラル。欧州の見聞がアジアに最初に告げられる、国境の町マンチュリー。

やがて厨房から声がかかり、呼ばれたマーシャがミルクとホットケーキを運んで来た。それから彼女はまた蓄音機の方へ行った。アンダンテ・カンタービレが終ったのだ。

亜矢子さんが顔を寄せてきた。

「マーシャはずっとロシア人学校に通っていたのだけれど、この界隈には歳の近い同国人の友達がいないし、いつもお店の手伝いばかりで孤独だったのよ」

「彼女の生まれはどこ？　年はいくつ？」
「ウラジオストックですって。年は十七か八ね。大人っぽいけどまだ若いわ。それでね、今言ったように孤独だったわけね。ところが戦争でこんなことになってしまったでしょう。この町にもソ連軍が入ってきて、ホラ、美也子さんも見たでしょう、あのすごい戦車。男の子の学生などは手榴弾一つ持って敵の戦車の下にとびこむ練習をしていたけれど、ソ連の戦車では相手にならない。日本のやりかたは目茶苦茶。学生がかわいそうだわ。ああ、話はマーシャの事だけれど、このお店にもソビエト軍の若い軍人が来るようになって彼女はとても明るくなったの」
「えっ、ここにソ連軍がくるの？」
　私のゆるみきっていた体がひき締まり、背中はソファの凭れから離れてしまった。敵兵はここにも来るのか。しかし今はしばらくロシア人の女の子の身の上話を聞いてあげなければならない。
　亜矢子さんは私の動揺をあわれむように、うす笑いを浮べて、
「気になさらないで。来るのは上官ばかりで規律を守る人達ですからね。よかったら美也子さんもだれかとつき合ってみませんか。マーシャにも最近は愛し合っている軍人がいるようです。だから御覧なさい、彼女はあんなにきれいになったわ」
　と言った。二人はマーシャを見た。彼女は暗い壁を背にして立っていたが自分が話題にのぼっていることを知らないで、こちらに向かって先刻と同じように片眼を閉じて意味不明のウインクを送った。灯火の光が顔半分を浮き上らせ、それは欧州人ならではの立体的な美しさだった。
　マーシャのことはわかった。赤軍とはいえ彼女が自国の若者に惹かれるのは正常で、応援してあげたい。でも露国人でない亜矢子さんまでソ連兵士と深い関係になったことは気持よく聞ける話ではない。相手が外国人だから、というつもりはないが、亜矢子さんの場合は素敵なロマンスと拍手を送る気にはなれない。彼女のお父様がシベリア送りで不在となり、銀行が封鎖されて預金の引出しも不可能になったとすれば家財でも売るよりほか暮す途がないだろうが、大和撫子と讃えられて成長した女が俄かに戦勝国となったソ連人に媚びて生計を立てるのは日本人として残念なことだ。
　そのうえ彼女は私を引き込もうとしている。亜矢子さんは私が欠乏の毎日を送っていると思い、仕事を与えるつもりでこの店に連れて来たのである。いまこのフロアには私達三人のほかだれもいないが、兵営の服務時間が終れば彼等はやってくるだろう。この店は兵士の溜り場だ。亜矢子さんはそれを待っているのか。彼女ほどきれいで見映えのする女性もざらにはいないので兵士たちが言い寄るのは想像するに難くない。私だっておなかを満たそうと思えばあんな兵士の二人や三人いつでも相手をしてあげる自信はあるが、顔を見合わせたときどんな会話を交せばよいのだろう。相手は退却する関東軍を、つまり私達の父や夫を戦車で追い散らした話でもするのだろうか。こちらはロシア語は話せないし、それよりも私には何も話す気が起こらない。ましてそれ以上のことなど出来るものではない。
　ソ連の兵士が来るのなら、この椅子にのんびり坐って音楽に浸っている時間はもうない。まったく敗戦の夏以来自分の行為は防御することと逃走することに明け暮れているような気がする。
　私は残っていたミルクを飲んでしまって、
「いま何時？」
　と亜矢子さんにたずねた。
　以前持っていたラドオの腕時計は避難している間になくしてしまった。痩せたのでベルトがゆるくなり、ポケットに入れたりしているうちになくしてしまったのである。略奪者が来て何かよこせと言ったら私の命の身代りとして渡してやるつもりだった。父に買ってもらったもので宝物にしていたのだけれど。思わず手首を見ると、そこは夏の陽焼けが残っていてマーシャの白い腕とは比べようもなくやせていた。
「五時半になったわ」
　亜矢子さんが自分の腕時計を見て言った。
「そろそろ店を出ましょう」
　私は腰が落ちつかなくなった。
「まだ早いわ。もう少しいましょうよ」
　亜矢子さんは動こうとしない。
　その時マーシャがレコードの曲を変えた。管弦楽が終り今度は歌曲だ。ドイツ語らしいソプラノで歌っている。ああこれも知っている。「春への憧れ」という曲だ。音楽の授業で歌ったことがある。この曲は若くして身罷ったモーツァルトが死の前年に作曲したそうで、彼の晩年は貧困と病苦の愁いに満ちたものだったが、これはまた何と晴朗な旋律だろうか。雪に閉ざされて春を待つドイツの子供達のために書かれたとはいえ、自分の苦悩の翳り一片さえとどめていない透明さである。モーツァルトも春を待っていたにちがいない。早春、目覚めて窓を開けば清冽な朝の香気が吹きこみ、撓う若葉の小枝に春の鶯が来て囀る。そんな連想を生む曲である。
　これは私の愛唱歌として学生時代に刻みつけたものだけれど、今の場合は気が急いていてモーツァルトが多くの子供達のために自らの命を縮めてまでも作った曲、それさえ受け入れることができないのだった。
「どうなさったの、きつい眼をして。飽きたの。美也子さんが帰るなら私も一緒に帰ります。でもこれからお店が賑

やかになる時間なのに」
亜矢子さんが言った。
この喫茶店の営業方針はわかった。亜矢子さん、あなたも見かけによらず不良少女なのね。こんな御乱行にも慣れているんでしょうけれど、あなたのお母様はどんな気持でいられることか。あなたはソ連兵士と遊ぶつもりでも、美也子がついている時はそれをさせない。あなたの美しさを惜しむから。
「嫌。わたしは帰るわ。さあ」
私は会社の厚生会館で残務整理を手伝って得たお金のうちから赤い軍票紙幣を取りだして二人分並べてテーブルの上に置くと、亜矢子さんのハンドバッグを腕にかかえて立ちあがる。
「そんなに急がなくても」
亜矢子さんもしぶしぶ重い腰をあげた。マーシャのところへ行って小声で何か話し合っていたが、マーシャが了解した、というようにうなずいたので戻ってきた。
「あの人によろしく言っておいてね」
私は言った。
「私が一緒じゃなくても美也子さんはこの店にあそびに来ると好いわ。マーシャにはそのことを頼んでおいたの」
と亜矢子さん。
だれがそんなことを頼んだというのか。自分がいなくても美也子が来たらソ連士官に紹介してやってとマーシャと打ち合わせたのだろうか。
マーシャがこちらにやってきて、
「ドスビダーニャ」
と言って私の頬に唇をあてた。私も、
「ドスビダーニャ」
と答えた。さよなら、という意味だ。
私達は店の扉を押して外に出た。
六時を過ぎたら表はもう薄暮。それに寒かった。外套を着ていない私の襟くびに冷たいものが落ち、それは背中の方にまで入ってきた。
「あら、雪だ」
私はバッグを亜矢子さんに渡しながら小さく叫んで空を見た。
昼間は晴れていたのにいま天は灰色に閉じられ、西の一角だけ雲が破れて高い空が見え、そこだけ夕焼けの残りがあった。
四度目の満洲の冬の到来である。衣も食も乏しく火の気もなくて、どのようにして冬をのりきるのか。どうなの、耐えられますか、と自分の体に聞いてみるほかはない。この体は返事をしてくれないが、スチームも切れている白い部屋でただ一個のビーナスに見守られながら毛布にくるまって眠ることを考えると頭の中も白くなる。

馬車よ静かに走れ

露店市場で黒パンと豚肉の腸詰を今夜の分だけ買って帰ってきた。
かじかんだ指に息を吹きかけながら部屋のドアを開けようとしていると、後を追うように階段を昇ってくる人がある。
何というお名前だったか、ええっと、ああ思い出した、大学生の高治さんだ。夏の終りにこの部屋の窓から見える老虎灘の海に私を連れて行って下さった方である。あの海岸では私が座ぶとんほどもあるクラゲを踏みつけて悲鳴をあげたのが出来事らしい出来事で、ほかに印象に残る会話もかわさなかった人なので以後気にかけたことがなかった。でもあの日の水平線には真っ白い雲が立っていたわ。
今日は私に何か御用事でもあるのですか。
私は三階の廊下に立ったまま、
「あら、こんにちわ。高治サン、お元気ですか」
とはずんで言い、ちょっと可愛らしさを演出したつもりだった。御無沙汰したのでお詫びの意味をこめたのだ。
すると高治さんは最後の一段を登りきらずに立ちどまり、なにかショックを受けたように息をつめて私を見た。そして話しはじめようとするのだが緊張していてなめらかに声が出ない。この人はよほど情緒の細やかな男性か、対面した人にすぐ負けてしまう気弱な人か、それとも私のことを思って下さっているからなのか、もしそうならお気の毒だと同情が湧いてきて、満面ニコニコ顔を作って彼が言いだすのを待った。
「美也子さん、階下に電話がかかって来ています。ロビーの電話です」
高治さんはやっと言った。私を見た時彼の中ではいそがしく言葉の選択なされたことだろうが、出てきたものはありふれた伝達の言葉だった。
「わたしに電話が？　だれでしょうか」
「リュウさんという男の人です。急ぎの用があるそうです」
リュウさんとは雅文さんのことだ。
「そうですか。ありがとう、いま参ります」
開いたドアの内側に食料品の包みを押しやり、高治さんの後に続いて階下に降りた。階段が折れ曲る踊場の窓から冬の淡い光が射し、庭の裸木の影が床に波打って、踏み出す私の足にも縞模様をつくる。外は風が吹き始めたようだ。
この洋館がある臥竜台とあの南山麓とでは距離がありすぎて、雅文さんとしては不便をかこち、私はそれなりに気楽であったのだが、つい先日人民政府の努力でこの地区にも電話が復活し早速雅文さんが私に誘いをかけて来たとい

うわけなのだ。
　こうして私はだんだんと雅文さんから離れがたくなってゆく。今日の電話は多分逢曳の約束にちがいない。
　最近の私は中国人の彼とつきあうことに躊躇(ためら)いを感じなくなってしまった。考え抜いた末のことだから。だから今は苦しまずにわりと元気よくその日を過ごしてゆけるのだ。
　しかし自分ながら浅はかだと思うのは、この先も彼に愛されるなら東京には戻らずこの都会で暮したいという気持が、彼とのあの時間に限らず日常の心にも起こってきたことだった。考えてみれば大連から神戸まではわずか五日の船旅という。時代と政情が変われればいつでも日本に帰還できるよという雅文さんの楽観主義が、このごろの私を制してしまっている。女はだめだ。
　私はロビーの入口でたたずんでいる高治さんに背を向けて受話器をとりあげた。
「お待たせしました。わたしです」
「美也子さんですね」
　雅文さんの声である。
「いてくれて本当によかった。さっきも電話したがだれも出てくれないのだ」
「わたしはマーケットに買物に行って今帰って来たのです。この家は広いからロビーに人がいなければだれにもベルの音は聞こえないわ。それで、どうなさったの？」
「うん、大変なことになったのだ。聞いて腰をぬかさないでほしい。実はね……」
「どうしたの？」
「つまりね、午前中役所の僕のところに港湾の保安隊の知人から連絡があって、あなたのお父さんらしい人を見かけたので警務室に来てもらっているというのだよ」
「なあにそれ、またいつもの冗談？」
「バカ。わざわざ電話をかけてからかうほどヒマではない。僕はふだんから駅ばかりか沿岸の方にも手配を頼んでおいた。奥地からの避難者は列車や徒歩で来るとは限らない。鳥井伸也という日本人が波止場にいたので、その知人に渡しておいたメモと照合したら符号したので通知してきたわけさ。詳しいことはまだわからないが、新義州から来た貨物運搬のジャンクに乗ってきたといっている。これは本当の話だよ。美也子さん、聞いているのか」
　驚きすぎて、私の心は冬眠中で雅文さんの言ってることが触れてこないのだ。
「新義州ってどこ？」
「朝鮮だと思うが」
「お父様は朝鮮まで行っていたのかしら」
「ひどく落ち着いているな。うれしくないのか美也子さんは」

「信じられないから。それでどうすればいいの、わたしは」
「バカ。それを確認するためにこれから波止場に行かなくてはならないのだ。早く仕度してくれ」
「わたしはいま外から帰ったばかりだからこのままの服装(なり)でいいけれど」
「そうか。しかし港は寒いからあるものをしっかり着込んだ方がいいよ。仕度をしたらそこを出て電車通りから馬車をひろって日本橋まで来てほしい。馭者は日本語がわかるから心配しなくていい。僕はこれから役所を出て日本橋へ行くからね」
「大連に日本橋なんてあるの？」
「あるさ。美也子さんの頭の中にあるのはお江戸日本橋のことだろう。大連の日本橋は日本人が勝手につけた名称だ。もちろん僕はそれを認めないが、今は便宜上日本橋と言っておくよ。まあそんなことはどうでもよいが、とにかく今決めたことをやってください」
「でもあなたにはお仕事があるのでしょう。悪いわ。わたし一人でも行けますわ」
「いや、それはだめだ。お父さんに会うには僕と保安隊の立合が必要だ。それに美也子さんのような女性にはあそこは危険区だからね。僕も行く」
「仕事中なのに」
「素直に言えば、あなたの手助けをしても僕には何の利益もない。お父さんが無事お帰りになると僕は美也子さんを失うことになるだろう。お父さんの考え方と僕のそれとはあまりに違いすぎる。今度の戦争では敵対していたわけだから。僕には話し合う用意があるが、お父さんはイエスとは言わない。美也子さんには申訳ないが、僕はこの知らせを黙殺しようかと迷っていた」
「それはひどい」
「電話でぐちを言っても始まらない。とにかく喜んでほしい。僕には悲しいだけだが。それでは今決めたことをちゃんとやってください。電話を切るから」
　電話は切れた。
　受話器を戻してから私はぼかんとしてしまった。感激するはずなのに胸の中では歓びの扉を開く糸がプツリと切れていてその扉が開かない。そんな状態でいつものメランコリーからぬけ出せないのだ。
「美也子さん、どうかしましたか？」
　高治さんがそばに来て言っている。
　私はロビーの窓の向こうの、寒々と揺れている木の小枝に向けていた視線を高治さんに戻して、
「父に似た人がいたらしいのです。どうせ人違いでしょうけど」
　と、自分に聞かせるために言った。
「お父さんが、ですか。それはよかったじゃありませんか。

ほんとうに」

高治さんは事情を知らないながら私の身の上によいことが起こったのを知ったのだろう、素直に喜んでくれるのだった。それなのに私は彼にこの経過を逐一説明して感謝を表す気がしなかった。高治さん、私のような無感動で冷酷な女を相手になさらない方がいいわよ、と私は思った。しかし、それでもなお私は善良なこの人に用事を頼んで利用することを考えていた。

「それでね、いまからすぐに日本橋まで出かけるの。電車道路まで出たら馬車はつかまるかしら」

と私はたずねた。

「えっ、そうですか。それでは僕が道路まで出て馬車の空車をさがします。美也子さんはあとからゆっくり来てください」

と高治さんは言った。本当にやさしい人。

彼は素早く身支度をして外に出て行った。私はぼんやり見送るばかりで心は曇り空のように閉ぎされ、体に信号が伝わらない。それでも二瞬、三瞬の後、ドキンと胸のどこかで音がして発進のスイッチは入った。

私は部屋に戻った。波止場の寒さを思ってタルバガンの外套の下にジャケットを着込んだ。

波止場とは私が逃避行のあとの回復期に雅文さんと一緒に見に行った、雑然として活気にみちたあの市場のことか。林立した帆柱に青や赤の帆布が風をはらみ、血に染まった魚が荷上げされ、今にも屠殺されようとする豚の悲鳴が耳をかきむしり、胡弓の音やドラの響きが哀感をそそるあの町のことか。

あんなところに父がいたのだろうか。今の電話だと父は満朝国境の鴨緑江から回航してきた運搬船に乗っていたという。四平街で撃たれたはずの父が何の理由で朝鮮までも行ったのだろうか。大陸には知人の多い父の事、どこに行き、どこから現れてもあの男なら不思議はなく心配も不要だと同僚に言われていたし、娘の私もそんな評判をうのみにして気遣いもしなかったのだが、今度ばかりは父も荒野のまっ只中に倒れたのだと思っている。だから雅文さんの知らせはあきらかに人ちがいだ。

しかし私は外套の釦(ボタン)をかけ終ると再び部屋のドアを閉め、階段をかけ降り、玄関に出て脱いだばかりの靴を履いて外に走り出た。中庭の楡の裸木の間をかけ抜け、鉄門の外へ。

臥竜台の道は急勾配にくだり、やがて路面電車の走る大通りと交叉している。

今日の空模様は私の心のように移り易く、先刻は階段の踊り場に薄い陽が射して木の影が映っていたのに、今は暗く曇り、白いものさえ舞いはじめた。

四ツ角を曲り、広い道に出ると、どっと吹雪いてきた。乾いた粉雪が帽子をかぶらない髪に降りかかる。凍りつく

眼に白い風景がかすむ。

本通りの四辻の角に高治さんがつかまえた馬車が停まっていた。かたわらに高治さんが立っている。雪が降り出したので中国人の馭者が座席に天蓋をかけようとしている。馬は体の小さな満洲馬で仔馬でも孕んでいるように丸々としたおなかをしていた。毛色は葦毛(あしげ)。

「お馬さん、御苦労だけれどたのむわネ」

私は近寄って馬に祈った。馬は、疲れた優しい眼をまたたいて、はい、と答えたような気がした。

「どうぞお乗りください。波止場まで行ってくれるそうです」

高治さんが言った。

「日本橋はその途中にあるのですか?」

「ええ、橋といっても跨線橋(こせんきょう)ですが、それを渡ると間もなく波止場ですから」

「そう。それではお世話になります」

私はきゃしゃなステップに片足をかけ、車体に付いている手摺をにぎって馬車に乗りこんだ。車軸の発条(バネ)がしなやかなので、私の重みだけでも車体がふわりと沈む。

高治さんは車上の私を見上げて迷っている様子だったが、決意したように、

「僕もその近くまで送ってゆきます」

と続いて乗って来た。その時馭者が「好!」と号令をかけ、心得顔の馬がたちまち第一歩を踏み出したので彼はよろけて私の上に倒れかかった。私もバランスを失って倒れつつも思わず手を出して高治さんの肩を抱いてしまった。二人は暗くなった幌の中で声を忍んで笑った。

「高治さんも一緒に来てくれるの? でもわたしが父と会うところなぞ見ても他人のあなたにはちっとも感動的でないわよ。わたしも泣き顔なんか見せるの嫌だし。もし人違いだったらなおつまらない場面になるわ」

私は高治さんを離しながら言った。

「ええ、邪魔はしません。劉さんという方が来たら僕は失礼しますから」

高治さんはそう言うのだ。

この人は報われないことをしている。あなたの真心は伝わるが、感謝はするけれど私にはどうすることもできないわ。

馬車はやがてアスファルトの路面に車輪がふれるその感触を私に伝えながら次第に速くなった。

大連の日本橋は重々しい数条の鉄路の上に架けられた陸の橋だった。

日本が中国の、満洲と称されていた東北部を支配したつい一年前までこの数条のレールは重要な役割を果していたことだろう。北満の沃野で収穫された大豆が、撫順(ブシュン)の露店

掘で有名な石炭が、このレールの上を通り日本に運ばれた。象徴的に言うなら満洲人の血と脂がくる日もくる日もこのレールによって奪われた。私の言い方はおそらく解放軍に参加している雅文さんの思想に感化されたものだろうが、この地に来て直接見、体験した今は、学校での世界地理のあの退屈な自習時間を取り戻したくなるくらい日本以外の国々の事情に共感し、理解もできるようになった。しかし私の理解は雅文さんの思想の受け売りだから、それは父の鉄道の仕事と対立する。

ハルビンの父の社宅の書斎には南満洲鉄道会社に関する書物や資料がギッシリ詰まった本棚があり、その頃は父の読書には無関心な私だったが、ひやかし半分にページを捲った本は満洲の産業を述べたもので、結末の文章だけ少し記憶している。それは、

〈満洲のかくの如き発達が、主として日本の努力に負えるに拘らず、日本のこれによって得たる利益はその払える犠牲に比べてきわめて少い。これに反して満洲及び在住支那人の得たる福祉は莫大なるものである。日本は未開の土地を開拓して世界の富を増し、治安を推持して住民の安寧をはかり、あらゆる文明的施設によって満洲を改善したることによって人類のために偉大なる寄与をなせるものである。日本の満洲経営は日本人が昂然として世界に誇り得る事業である〉

というものです。

これはおそらく父の教科書のようなもので父の生き方の信条だったのでしょうから、もし生きて大連に帰ってくれば今は人民政府とソ連軍が治めているかつての植民地都市を見てひどいショックをお受けになるにちがいない。

それよりも私が気にかかるのは父達が匪賊か野盗のように見て敵対していた中国解放軍の闘士が私の保護者であり恋人であることだ。父が私達の事情を知ったらさぞお怒りになることだろう。でもこうなったことについては一人で生活しなければならなかった私のことも考えてほしい。

私と高治さんを乗せた馬車が橋の上にさしかかると、折しもくろがね色の機関車が耳をつんざく汽笛を鳴らして橋の下をくぐり抜けるところだった。

鉄の支柱をゆり動かす轟音で驚いたのだろう、私達の小さな馬は馭者の鞭にも従順さを失い、いままでの歩調のリズムをくずしてしまったらしく、馬車が揺れだした。機関車が吐き出した黒煙が橋を包み、煙の中に馬車はとじこめられてしまった。

馬車が停まったので、私は側面の覆いをはずして明るくなった外を眺めた。汽車は通過し煙は散った。空がまぶしく雪はほとんど止み、地上には晴朗な気分が満ちてくる。寒気が薄着の私をしめつける。

対向座席に腰かけて襟巻に顔をうずめていた高治さんが

言った。

「美也子さんがこうして雪の街を馬車で行くのを見ていると、『クララ・ミーリッチ』のクララのように思えます」

今まで黙っていた人が突然言い出すので私はめんくらってしまう。

「何ですか、クララって」

「ツルゲーネフの小説に出てくるヒロインの名前です。ある貴族が催したマチネーに招かれたクララという若い女優が舞台上から観客の中に一人の青年を見つけて激しく恋してしまうのです。クララは手紙を書いて青年を公園の並木道に呼び出して愛を告げようとしましたが、世間知らずで学問一筋の青年アラートフには通じません。純情ではあるが誇り高いクララは傷ついて走り去り、遠い地で服毒自殺してしまいます。新聞で才能ある若い女優の死を知ってからアラートフの心に変化が起き、彼女の亡霊を恋するようになって彼も死ぬのです」

日常の会話もしどろもどろな人が、突然長い物語めいた話をしたので私は少し驚いた。

「まあ、悲劇的な小説」

「アラートフとの逢曳きのためにモスクワのトウエルスコーイ並木道に現れた女優クララをツルゲーネフはうまく描いていますが、いま美也子さんを見ていてその時のクララに似ているなと思ったものだから」

「わたしがその女優の人に似ているですって？　それは光栄なことね。でもこんな堕落した栄養不良のクララではやはりふられてしまいますわ」

高治さんは私をほめているのに私は彼をすぐ揶揄してしまう。私の関心は恐らく父とは別人であろう人との気まずい対面や、橋の袂に来て汽車の煙に眼を赤くして待っているにちがいない雅文さんのことに向けられている。

幌を開けたのはそのためである。

「美也子さんがどうして堕落しているのですか？」

高治さんは身をのり出して来た。私はそれには答えず、

「こんなぼろ衣裳を着た女優はいませんよ」

と言いつつも外の様子に心を奪われていた。

前方で男の声がする。

「だれ在席車？　我也去」

雅文さんが馭者に話しかけているのだ。

「劉さんが来ましたわ」

私は思わずつぶやいてしまった。すると高治さんが立ち上がった。

「美也子さんを一人馬車にまかせると、どこかにかどわかされて行ってしまう気がしたので心配してついてきましたが、劉さんが来たのならもうその必要はない。美也子さん、本当にお父さんに会えることを祈っていますよ。今夜は臥竜台の方に戻りますか？」

「たぶん戻ります」
なぜか私は顔を赤らめた。時々部屋に帰らない自分の生活を見られた気がしたのだった。
「それでは庭の門は開けておきましょう」
「有難う」
高治さんは馬車を降りてしまった。決して愉快そうな顔ではなかった。そして申し訳ない気持でいっぱいの私が首を出して見ている雪の視界からすぐ去った。
「いまの男性はだれかね？」
と言いながら雅文さんが乗りこんでくる。大きな人なので体重がかかり馬車が沈む。
「さあ、お座りなさい」
と私は端に寄って座をあけた。
「わたしのいるあの洋館に同居している人よ。工科大学の学生さんなのに文学のほうにも知識の深い方。今もツルゲーネフの小説のことを話してくれていたの。わたしが一人で馬車に乗るのは危いからとここまで同乗してくれたのよ」
「ふん。それは親切な人だ。それはきっと美也子さんを好きなのだ。ライバル出現、というわけか」
「嫉妬しているの？　それは雅文さんがやっている住宅調整とかいう人民政府の政策で他人同士を一軒の家に押しこめるからこういう事になるのよ。こんな事をしなければ高治さんとは知り合いにはならなかったわ」
「僕のせいだというの」
「そう、雅文さんがご自分で種をまいたのです。自業自得」
雅文さんはほほえみながら黙ってしまった。
馬車はふたたび走り始める。このあたりの街はその昔凍ることのない港を求めて極東に進出したロシアによって欧風の都会となった雰囲気を残して灰色の洋風館が港の方まで押し並んでいるが、今はすっかり中国人街となり、家畜を料理する匂いと煙が、青や赤に塗られた店の看板あたりの中空に漂っていた。もし雪がなければ往来には女や子供が夕食のテーブルを持ち出して御馳走を通行人に見せながら食事する時刻である。
「もうすぐ波止場だ」
雅文さんが言う。
「あら。去年の秋に二人で出かけた時もこの道だったかなあ。もう忘れてしまった。知らない町は駄目」
「うん。あの時は実にひどかった」
「なにが、ひどかったの？」
「こんな状況ではだれもがそうだろうが、あの時の君は生ける屍だったよ」
「あなたは中国人なのですもの。日本人は侵略者で、敵でしたから。わたしが生ける屍になって本当は面白がっているのでしょう」
「美也子さんは身近かになりすぎた。だから僕の歴史的判

断の中であなたをどう位置づけてよいのかわからないのだ」
「雅文さんは主義を優先させるのね。私情というものを押さえているのよ。手は早いのに」
「ああ、そうかもしれない」
雅文さんは笑った。
開け放した幌の間から雲の動きだした空が見えた。箒を立てたようなポプラの裸木がその空を指している。
雅文さんが不意に私の前に手を出してきたので、また私に触れたがるいつもの悪い癖が出たのかと思い、
「どうしたの？」
と聞くと、
「あなたの髪に雪がついている」
と言う。
「そう。それでは払って頂戴」
私は素直な気持になって雅文さんのほうへ首をのばした。彼は手袋を脱いで私の髪にさわりながら、
「中国在留の日本人は間もなく本国に帰ってもらうことになるが、人民政府は鉄道の技術者についてはいま引き留め策をとっている。つまり暫くの間大陸に留まってもらう。僕らが鉄道や付属施設のすべてを自主管理できるようになるまで力を貸してもらいたいのだ。技術者がいまみな引揚げたら中国東北の鉄道や産業は二十年遅れてしまう。美也子さんのお父さんが御健在ならやはり帰国の延期をお願いすることになるでしょう。長い間ではないが」
と言った。
「満鉄の人は捕虜と同じね。それで用事のない女はみな帰されてしまうのね」
私にはやはり父が生きて大連に帰還したということが信じられないし、それはそれとして間もなく自分が東京へ帰されるということが何かとてもつまらないことのように思えて来た。
「そこのところを君は決断しなくてはいけない。僕と暮すなら君の気に入るような生活を築くつもりだし、いつも言うように決して後悔させたりはしない。ただ君の進退を決めるのは結局お父さんだと思うと、僕たちの前途は絶望的だ」
私は深くため息をつきながら話を変える。
「わたしの髪の雪はどうなった？」
雅文さんは私の頭を軽くたたいて、
「君の熱で雪は溶けてしまった」
と言った。
建てこんだ家並の向うに青い旗が見え、激しく翻(ひるがえ)っていた。旗はジャンクの帆柱の先端についている。荷上げされる豚の悲鳴が聞えてきた。馬車は波止場に到着したのだ。
着いたわ！　期待と戦慄が体の中を走った。

クリスマス・イヴ

あの日、波止場に父はいなかった。その父らしい人は保安隊員の命令に従わず町へ出て行ってしまったそうである。しかし、もしその人が本当に父なら私には父のめざす場所がわかっていたので雅文さんと別れ、馬車を捨て、躊躇わず東公園町にある会社に行った。駆けに駆けて。

私は会社の玄関から出てくる二、三人の男性を見た。以前私が学生の頃、「お父さんはモンブランでわたしは富士山よ」と背の高さを比べて父の大きさに納得したことがあったけれど、その人影のうちの一人は満洲の男たちが着る裾の長い綿入れのオーヴァーを着ていたにもかかわらず、ひと目で娘の私がいつもダンディだと熱を上げていた父であることがわかった。私はかけ寄って、モンブランにとりつく登山家のように父の胸にかじりついたのだった。寒い夕暮で、涙は凍ってまぶたも動かず、父の少し老けた顔もかすんで仰がれた。

その父はいま大連に来て仕事をしている。

植民地での日本の崩壊とともに会社も倒れたが、満洲のこの広い地域を支配していた事業なので、劉さんも言ったように中国側へ移管の仕事が残っているそうで、父は東公園町のビルヂングに入ったまま、私の住んでいる臥竜台の家にはほとんど来たことがない。来てよ、と誘っても私がしぶとく生きているので安心したのだろうか、「忙しい」とか「お前の部屋は狭い」とか文句をつけてこちらには来たがらない。

けれどこの館に住む人たちが気持をそろえて迎えたクリスマスの夜に父はついにやって来た。そう、私は父のことはひとまず措いて、今年は雪の降る日に訪れたクリスマスのことを先に書く。

父がお金をくれるので空腹をかかえる日も減り、孤独感もなくなって私は明るい人間に戻ってきた。すると今まで没交渉だったこの屋敷の人々に興味が出てきて、私は笑顔で挨拶するようになった。去年の秋以来自分の部屋で泣いてばかりいたので同じ屋根の下に十家族もの方々が住んでいることに私はまるで関心を払わなかったのだった。高治さんに対しても無関心だったが、馬車に乗った日の印象が残り、それからは彼に優しくしてあげられるようになった。

そんな時にまた大連でのクリスマス・イヴがやってきたのだ。

この屋敷にはクリスチャンの方が多いそうで、岡本さんという年配の男性が発起人となって皆で準備をして貧しいけれど楽しいパーティを開くことになった。一人でも多くの人を集めて日本に帰国するまでは近隣同志で団結して難局を打開しましょうという岡本さんの言葉に動かされて、私は矢嶋亜矢子さんに電話して、来てくれるように頼んだ。

彼女が承諾したので男の人や主婦の方の多い顔ぶれに亜矢子さんと私との二輪の花？　を添えることになった。

あとで亜矢子さんが来て岡本さんを紹介した時、岡本さんは帰国するまで団結をと、くどくど語るのだった。私は、相手が年配者ならいいが大陸っ子の若い人にそんなことを言っても同意されないと思い、彼女のために心の中で憤慨していたが、亜矢子さんはさからわず頷いているだけだった。岡本さんのような御老人は帰国を待ち望んでおられるだろうがこの町で生まれ育った亜矢子さんに同意を求めるのは考えが至らないのではないだろうか。可哀そうな亜矢子さん。

その日は世話人が招いたというドイツ人の修道女がやって来た。

どこの僧院から来られた方であろうか、泰西名画集の中からぬけ出してきたような古典的な黒衣に身をつつんだ気品高いシスターが二人、金モールと色紙で飾られたホールの正面に腰をかけて静かに微笑んでいるだけで降誕祭の雰囲気は盛り上がった。

礼拝のあと、一人のシスターがマタイ伝四章にあるイエスの言葉について講話をした。神の試練でイエスが四十日の断食をした時悪魔が来て、まことに汝が神の子であるならここにある石をパンに変えてみよとあざ笑った。イエスは即座に「人の生くるはパンのみに生くるにあらず、神の口より出ずるすべての言葉による」と答えられた。

いま大陸在住の日本人達を襲っている飢餓を、精神の面から救おうとしてシスターは語られたのだろうが、私は大連に到着した日に空腹のために町の中で坐りこんだ事を思い出してなかなかイエスのまねはできません、とシスターに訴えたくなった。

次にもう一人のシスターがマタイ伝二十六章の講話をした。イエスを捕縛に来たパリサイ人の一人がイエスにおどりかかろうとすると、イエスに従っていた男が剣を抜いて相手の耳を斬り落とした。イエスは直ちに奇蹟を行なってその耳を癒し、斬りつけた同志に向って、「汝の剣をもとに収めよ。すべて剣を取る者は剣にて亡ぶ。われ、わが父に請いて十二軍にあまる御使を今与えらるること能わずと思うか。もし、しかせばかくあるべく記された聖書はいかで成就すべき」と言われた。

これも今度の戦争についての教訓としてシスターは語られたのです。

御年配の方々が自室に帰られたあと、若い人達が残って讃美歌を歌ったりトランプをしたりしてパーティを続けた。

夜晩くホールをぬけ出して部屋に戻ってみると父はいつも私が使っているロッキングチェアに腰をおろし、私がしていたように窓ガラスの曇りを指でぬぐっていた。することもなくこの部屋に座っていた時の私のしぐさを父はそっ

くりやっている。
「お父さんも階下にいらっしゃいな。皆さん善男善女ばかりよ」
私は言った。
「私とイエス様は気が合わない」
父は笑顔で私を見た。父に椅子を取られているので私はしかたなくベッドに寝ころがる。
「これは立派な屋敷だ。この家の主は相当の資産家だったのだろう」
父はガラスについた水蒸気が凍りはじめて今しも華麗な花模様に結晶しようとしている窓に息を吹きかけて外を見た。私も窓の外を見るときは息を吐いてガラスの氷を溶かしていたものだ。
「ちがうわ。この家はさる大きな会社の社宅だったのよ」
「そうか。いま外は暗くて何も見えないが昼間の眺めはどうかね？」
「昼間だと丘の間から海が見える。一度行ってみたことがあるけど。――あの汽車でね、ここに来てからひと月以上も体の具合いが悪かったでしょう。この窓から海を見ながら泣いていたわよ」
「うん。それについては毎回お前に責められる。まったく気の毒なことをした」
「一人で放り出されたおかげでわたしはいろいろしなくてもよい経験をさせてもらいましたが。この部屋を借りたことにも苦しい事情があるのよ。お父さんが聞いたらまっ青になるような事もしました。でもわたしの責任ではありません」
「お前がこの一年間してきたことはお父さんの責任さ。いくらでも苦情は聞く。しかし佐世保に向かう船に乗ったら大連での事は全部忘れろ。人に話すことはならんぞ」
窓の外をのぞいても室内の明りがじゃまをして空地に雪が積もっているのが仄白く見えるだけなのに、父はそこから目を離さず言った。
「途中で汽車を降りたのがお父さんの無分別だったけれど、暴徒だと思った相手が知り合いの朝鮮の人だったからといって、わたしの乗っている汽車に戻るのを忘れるというのはどういうこと？」
私は話を始めにもどして父の失敗を詰問する。父はあわてたように手を振った。
「それはお前の誤解だ。私があの情況の中で娘から離れて平気だったと思うか。私は停車の理由を知りたくて列車を降りたのだし、出会った友達とも寸時話をする必要があった。その男は、戦時中公主嶺の農事試戦場で仕事をしていて、沿線の事情に詳しいのだ。私としては列車に乗っている避難者に情報を伝えるためにも彼と話す時間が必要だった。ほんの四、五分間のことで発車した汽車に間に会わなかったのだ。」
「お父さんは不死身なのね。いいえ、ほめてるわけじゃない。ではこうですか、斥候するつもりで、女子供の手前があるので勇士ぶって線路に下りたら偶然に昔の朋友がいて、話が弾んでいるうちにわたしの乗っている汽車は動いてしまった、仕方がないからその知り合いの朝鮮の人の郷里まで一緒に行ってしまった、というのんきな話なのですか？」
私の眉はしだいに吊りあがってくる。
「お父さんもあの時は青くなった。だが今言った通り不可能なことだった。その男はもちろん匪賊ではないが自分の組織を持っていて、機動力もあったのでトラックを用立ててくれたが沿線の動乱で結局列車を追うことが出来なくてね」
父はその時の経過をゆっくり思い出しているようだったが、切羽つまった時にもなんとか方策を立てて切り抜ける父に、相変らずやるわね、パパは、とその俊敏そうな横顔にキスしてあげたい気もしないではなかった。
「お父さんは行く先々でよい友達が居て強運な方ね」
「奉天以南はあの時点ではソ連もまだ来ていないという情報があったし、美也子が大連に着けば、ホラ、一緒だった山内さんや三浦さん家族ともども会社が一時救済してくれるはずだった」
「実にひどい話ね！　自分の娘が行き倒れても平気なの？」
寝台の上に俯せになっていた私はシーツにかみつき、足をバタバタさせて怒った。
すると父は立ちあがり、歩み寄ってきて、持っていた紙包みを差出して、
「パイナップルの缶詰なんて、ねえお前、久しぶりじゃないか。マーケットには出ていないよ。これは軍の物資だったものだからな。開けて御覧」
と鮮かなレッテルの貼られた缶を二つ、私の腕の中に置いた。
「缶切りがないわ」
「そいつは困ったな。何とかならないか」
父は、顎をシーツに押しつけている私をのぞきこんで言った。
「お前、顔が変わったな。――そうか、ハルビンに行って以来われわれには波乱万丈の毎日だったからね。顔だって変わるだろう」
「みにくくなったというの？」
と、私。
「いや、決して」
父は寝台の端に腰をかけて、
「大人になったのさ」
と言った。そして私の頭を撫でようとしたが、私はくるりと寝返りを打ってその手を躱してしまった。今は愛撫さ

れて喜ぶような気分ではない。
「わたしはお父さんのあとに従いて大陸に来たことに後悔なんかしていない。楽しかったのですもの。外国に出れば日本のことがわかると地理の先生が言っていたけど、本当ね。でも最後がよくなかったわ。そうよ、こんなにめちゃめちゃにされるとは思わなかった」
「われわれの事業は、アジアの人々のためによかれと思って行われたことだ。間違ってはいないよ」
「ちがう。わたしが言ってるのはわたしの身についての事よ。もう取り返しがつかないよ」
父は答えなかった。
私はいま、多くの失敗がギッシリ書きこまれつつある自分の小さな手帖のことを思った。
「満洲に来て面白いこともあったけれど、今は別の気持。今の私はノートでいえば書き損じたノート。汚れた紙屑」
私は投げつけるように言って、それでもパイナップルの缶詰をかかえて起きあがり、扉の方へ行った。
「どこへ行く?」
父がたずねた。
「一階の厨房へ行って缶を開けてきます」
ドアのノブに手をかけると父が私の背中に言った。
「私は美也子も知る通り残務処理があるから一年ほどは東京に帰れないよ。しかし美也子はここにいてはいけない。来春には引揚船が出る。促進運動をするから早い時期に東京に帰ること。もちろんお前一人ではない、会社の人の家族にも東京の人はいるから一緒に連れて行ってもらう。それでいいだろう」
私はノブを見つめる。あの亜矢子さんも日本へ帰ったらソ連兵士とのことは忘れて新しい生活に乗り出すだろう。
「日本人はだれも居残れないわ。帰るよりほかないでしょう」
父が無事であれば母にも申し訳は立つし、本当は母にも会いたいのだけれど、私もこうして生きているのだから、なにがなんでも父娘そろって東京に帰らなければというものでもない。大連にいて大陸の人々と仲良くし、雅文さんの理想がどこまで実現するか、その事に協力することはこれからの東京での生活より魅力的ではないか。いいえ、もっと素直に言って私は雅文さんと暮したくなったのだ。けれどこれは大冒険。
「ところで、あの劉という青年は何をしている者なのか?」
と父が質問した。私はホラ、おいでなさったと思って立ち竦んでしまった。
「劉さんは人民政府の役人で、中国の革命家」
私は答えた。
「それで、親しくしているのだね」
「恩のある人だからやむを得ません」

「どんな恩になったのか」
私はきっとなってふりかえり、
「私が一人放り出されて他人の男に面倒を見てもらうとすれば、どんな世話を受けたか見当はつくでしょう。いまこの缶のフタを開けてきますからパイナップルでも頂きながらゆっくり話してあげる。勘忍しろとお父さんが頭を下げたくらいではすまない内容だからね」
と居直ってしまい、父を脅かすように言いすててドアを開いて廊下に出た。閉めたドアに凭れて息をついた。
廊下は階下からの照明が三階まで届いて階段口のあたりが明るくなっている。下のホールでは亜矢子さんや高治さん達がサービス精神の旺盛な二人のシスターとまだ話し合っているらしく時々華やかな笑い声が聞えてくる。
私はうす暗い階段を降りて行きながら、部屋に戻ったら気分を変えてにこにこ笑いつつ自分と雅文さんの事を父に話してあげようと思った。

エピローグ

劉雅文さんは上海市南郊の田園で生まれた。生家は地主だそうである。彼は自分の育ちについて不名誉な階級の出身だと肩身の狭い思いを抱いているらしいのだが、私達のように富む者が優れていると考えたがる日本人から見れば奇異に感じられる。彼が身を投じた解放区の新秩序の中では、すべて物事は旧社会のそれとは全く逆さまの価値を持っている。解放軍の戦士は自分が貧民出身であることが胸に輝く勲章であるという。だから豪農の子である彼は、その生いたちや受けた教育については進んで話すことをしない。北京大学で政治学と日本語を攻めたが、上海の日本商社にいたこともあるのでそれで日本語に優れている。大学を卒業して研究者になるつもりだったが精神の彷徨のすえに中国共産党に入り、解放軍の戦士になったというのだ。途方もなく大きな国の、その中で流浪する何億の貧民の救済を考えるその情熱はすごいと思うが、残念なことに私はそれについて何の勉強もしていないし、共感も湧かない。
それ以後雅文さんは国民政府軍や日本軍との果なき戦いの生活に入った。昨日敵を掃討して解放した土地が今日は再び敵の手中に戻っている、という戦いのくりかえしのなかでいつもその前衛にいた。山東、河北で戦い、熱河を経て遼寧省に入った。小興安嶺の山の中で虎に出合ったこともある。しかし彼は知識人で体力もあったので軍の組織や友人から信頼されて指導的な人になってきたのはごく自然なことだ。疾風怒涛の青春というべきだ。
けれども満洲に進出した日本人が見ればそんな理想家の雅文さんも野の狼にひとしい群盗の一人でしかない。都会に住む人々は辺地に行くと馬賊に襲われる、というのが口

癖だった。大陸に勇名をはせた関東軍も、もとはといえば襲ってくる馬賊から鉄道を守る守備隊だったと聞かされた。しかし馬賊というのは私達が彼等に着せた汚名で、真実のところは抗日遊撃隊と言うべきだ。

大連の女学校を卒業した矢嶋亜矢子さんが見せてくれた国語用教材の「満洲補充読本」には、范家屯という村落にある日本軍管理下の小駅が一夜賊に襲撃され、この駅を守っていた日本人の若い警察官夫婦はこれに応戦、夫の警察官が救援を求めて本署に向け脱出したあと、二十五歳の妻はけなげにもモーゼル銃を取って賊等と撃ち合い、ついに敵弾を受けて殉職した実話が「殉国の女性」と題して書かれている。

父は神明町に一軒の家をみつけて半月ほど前から住んでいるが、私に臥竜台の部屋を引き払って神明町の方に来るようにと強く言ってきた。その住宅はどんな物盗り強盗も侵入できない頑丈な造りであるとのこと。父にとっては雅文さんがもっとも警戒すべき相手で、娘を奪って行く敵に映るのだと思う。私が弁解したら父の怒りと悲しみをさらに大きくするだけだ。

この部屋を出て父の所に戻るのは半日で片付くことだが、もちろん明日にでもそうしたいものの、大陸にいて彼と生活するか、母と碑文谷の家とが待つ東京に帰るか勇気の要る決断に迫られることになった。とはいっても潮が退くように同胞が引揚げて行く時に自分だけが任務もないのに居残るなんて出来るわけがない。出来ないことを承知しているのだからもう会ってはいけないのだが、苛立っている彼を慰めてあげたいという分裂した気持もあって、南山のアパートに行った。

暗い夕方で凍るような寒さだった。階段を登ると門の薔薇も蔓は枯れ、庭は池のそばの小径も凍てついて足がすべる。

雅文さんは外套を脱がせ、私を客間のテーブルの前に坐らせながら、

「僕の前歴など話しても、美也子さんは興味を示さない。しかも人民民主主義戦線の勝利はまだ遠い。僕達はまだ銃を手放すことができないのだ」

と言ったが、その口調にいつもの確信がなくて暗い気分が感じられた。それでも、

「酒を飲もう。今夜はロシアの酒ですごしたいね。美也子さんも飲むといいよ」

と酒を出してくる。

「わたしにも飲めるかな」

「ああ、飲むといい」

酒はウォッカで強烈なものだ。私には苦しいだけ。しかし水で薄めることを教えてくれたので、好奇心もあってグラス一杯分も飲んだ。雅文さんはそのままぐんぐん飲むが

あまり弾まないし、普段の雄弁も出てこない。私の方から切り出さなければ沈黙がやってくる。

「市長夫人にはなれそうもないわ」

私は言った。

「どうして？　それは君が東京に帰るという意味なのか」

雅文さんはじろりと私を見た。

「自分のことだから自分で決めたい。けれど父は不承知なの」

「それはわかっている。だが君がハッキリしないので僕も困っている。さっきまで机に向かっていたが、集中できなくて一ページも書けなかった」

と、雅文さんはテーブルの上の書類を示した。

「なんですか、それは？」

「日本人が大連市に支払う賠償金に関する委員会の報告さ。公正なものにするため僕も手を入れている」

「え？　日本人がこの町に賠償金を支払わなくてはいけないの？」

と覗きこんだが、書かれている文章にひらかなは一文字もなかった。

「中国の各都市が破壊されたのは日本が起こした戦争に原因があるのだから、大連でも市政建設公債三億円を起債した。在留日本人はこれに応募する義務があると思う」

雅文さんは言った。

私の不安は的中した。この人はやはり自国の立場を優先させる人民政府の人間で、いま飢えと寒さに苦しんでいる日本人に追い打ちをかけても心が痛まないもののようだ。私はその時はっきりと今後彼とは暮せないと思った。

しかし私は楽しそうに声をあげて、

「あら、酔ったわ。読めない字ばかり」

「ふふふ、中国文だから」

「雅文さんは任の重い人ね。あなたがはじめ私が思っていたように日本人だったら、よその国の政治に頭を突っこんでいる人なんて、わたしは全くきらいになっているわ」

「どうして？」

「わからない？　あなたがこの国の人だったからその熱心さや純粋さが納得できるのよ。だから好き」

「ふん、七歳も年下の美也子さんから純粋だなんて言われると妙な気持がする」

「気分は直りましたか？」

「暗いよ。君がいなくなれば淋しい」

「わたしはいつも忘れないわ。あなたが助けてくれたこと。命の恩人と思っています」

「それは有難う。しかしそんなこと問題外だ」

「雅文さんは人を指導する器量がある。将来はこの町の要人になれる方です。わたしなぞいなくても好い事がたくさん待っているわ」

「慰めは言わなくていいよ。だが、なんとかならないのか。思い切って中国の人民にならないか。市民権は僕が取得してあげる」

雅文さんは今は私に訴えるように言った。

「それはだめよ。今度の戦争で家族にはぐれたり、親と死別したりした子供ならこの国に住まわしてもくれるでしょうが、わたしのような大人の人間にはきびしいでしょう。まして異性関係があればなおさら。罪に問われるかもしれない。こわいわ」

「君一人のことで我々の国が目くじらを立てると思っているのか。君が僕の国を愛し、理解してくれるからこそ留まるのだから」

「それは雅文さんの個人の感情よ。今はこうでも将来この国の方針がどう変わるかわかりません。雅文さん一人の力ではどうにもならないこともあるわ。新興国の政治って、おそろしい面があると思うの」

雅文さんは口をつぐんだ。

彼が今もっと強烈に引き止めたとしても行先どれほど私の母国や私自身に理解をしめすか疑問に思われる。テーブルの上に載っている戦争賠償金の起債書が、どうにもならない二人の距離を示していないだろうか。

「ですから、おわびに来たの。晩いから今夜は泊めてください」

私は言った。すると彼は露骨な態度で、

「色仕掛けでけりをつけようとしてもごまかされるものか」

と言った。

「まあ、ひどい」

あからさまに言われたことに私は腹を立てたが、相手も怒っていた。二人の体の中でウォッカが燃えはじめたのだ。

彼はそばに寄ってきて私をつかみあげ、ソファの上に横倒しに投げ落とした。といってもそんな激しい感じがしただけで、実際は私の腰を掬ってかかえ、傍のソファにおろしたというだけだ。

それでも私は「キャッ」と悲鳴をあげた。声を忍ぶよりも何か叫んだほうが快感と解放感があるからだった。私は胸のなかで「これは茶番なのよ」と思いながら、

「雅文さんがすきだから来てあげたのに。そんなに腹が立つことならわたしはもう帰る！」

と起きあがろうとした。すると彼は上から覆いかぶさり、こちらの首に腕を巻きつけて押さえこみ、

「いや、やはり今夜は帰さない」

と言う。私の髪はめちゃめちゃに崩れ、顔がソファの底に押しつけられる。

「わかった。暴れないから手を放して。死んでしまう！」

喉がつぶされて咳込んだ。すると相手の腕の力がゆるんだので、それをすり抜けてソファの上に起きた。私は体を

折りまげて大袈裟な咳を続けていたが、それは次にどんな行為をするか考えるため時間をかせいでいたからだった。

今夜かぎりで二人の事は終ろうとしているので、彼のために私としては超弩級の奉仕を演出する決心をした。でもこれは今迄何度も演じていたことではあった。それを思うとほかに能のない私は恥かしさのために消えてしまいたい。けれどストーヴが燃えていて、体の内からはウォッカが助けてくれるので風邪をひくことはないだろう。

私は雅文さんの肩を突いて、

「もっと離れて。いえ、そうではなくあなたは居間の方に行っていて。わたしが呼ぶまで」

と強く言った。雅文さんがいつか「ダルニーの瞳」と讃えてくれたこの眼に力をこめて。

雅文さんが去ると、私は上に着ていたジャケットを脱いでソファの上に置いた。しばらく動かずにいた。それからどこかの未開の国の舞踏にあったしぐさを思い出しながら、遅い動作で着ているものすべてをつぎつぎと脱いだ。私の匂いが仄かに立ち、自分の香りに包まれて私は自信がついてくる。

ソファの上は投げられた衣服で花が散ったようになった。

（「カオス」23号より転載）

1512円（税込／送料共）

1512円（税込／送料共）

御注文はアジア文化社まで

同人雑誌紹介

カオス　東京都

同人誌は単なる文集であってはならない

朝川　彪
あさかわ　あきら

1932　大連市に生まれる
47　東京に引揚
70　大日本印刷株式会社入社
92　同社榎町事業部勤務

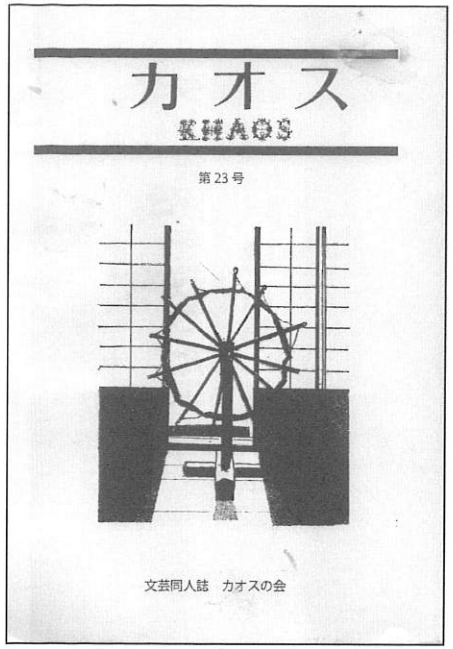
87　文芸同人誌「カオス」創刊に参加
2009　第４回角川全国俳句大賞入選
14　第８回同入選
16　第10回同入選

カオスの会は西東京市で活動しておりますが、発足以来三十一年目に入りました。現在の会員数は十四名、市内からの会員だけでなく他市、他県からも参加しております。

同人誌「カオス」の創刊は一九八七年で現在までに２３号を発行してきました。当初からの基本方針があります。「同人誌は単なる文集であってはならない」という考え方です。どんな作品でも集めて発行するのではなく、合評で評価の高かった作品を掲載しようということです。

原則として毎月例会を行います。例会の主な作業は作品の合評です。合評は、部分的な指摘におちいらないように、理想的な合評を目指して試行錯誤を重ねてきました。

最近、一つの方法として、初めに作者の制作意図を聞いてから、それを中心に感想を出し合うということを試みております。厳しい批評をされると、だれしも時には感情的になることがあります。それが原因で会を去っていった人もおりました。



毎月会報を発行　色々なジャンルの文学賞を受賞

「カオス」合評会にて（左から５人目が朝川彪氏）

カオス　編集委員会
〒202-0018　東京都西東京市中町 2-7-8　竹内稔方　☎ 042-422-7743

例会ごとに会員の合評作品が出されるとは限りません。そこで、市販の文芸誌などに興味ある作品があれば、研究作品として取り上げます。よい作品に接して自分の糧にするのが目的です。また、情報交換や雑談もします。雑談は無駄なようでも目に見えない効果があります。特に他人の創作体験は自分が創作する上で参考になることが多くあります。

毎月会報を発行します。次回例会の連絡から合評の内容、もろもろの情報、同人誌「カオス」への反響、当会に送られてくる文学賞への応募依頼の周知、翌月の例会で取り上げる作品の連絡などを掲載して会員に配布します。

同人誌「カオス」は発行のつど雑誌社や新聞社に贈呈して批判を仰ぐ一方、国会図書館をはじめ近隣の図書館に配布して一般の閲覧に供しております。また、公民館行事を通じて、同人誌「カオス」を展示しております。こうした結果、各方面から多くの批評や激励を戴いております。

色々なジャンルの文学賞を受賞してきました。ＮＨＫ放送文学大賞、文学界新人賞、中央公論新人賞、角川推理小説特別賞、毎日新聞児童文学最優秀賞、岡山吉備の国文学賞長編部門最優秀賞など。

当会では年齢や経験に関係なく文芸に熱心な方の入会を常に待ち望んでおります。